論　説

「対」の要諦――中国思想の心髄(1)

夏　　剛

中国的心性の基を為す「対」の発想・陰陽哲学の特徴：相剋相生・相互内包

中国的な心性の深層構造を理解する重要な鍵は，「対」の発想である。

中国思想の究極の源頭は，『易経』に在ると言って能い。この「五経」（儒家の５大経典）の筆頭は，**陰・陽２元の相互作用を以て森羅万象を解く哲学書**であり，**８卦の組み合せを用いて自然や社会の変化を占う実用書**である。

通称『周易』・略称『易』のこの奇書では，天地万物の元始である太極が陰・陽の２儀を生じ，其処から少陽・老陽・少陰・老陰（春・夏・秋・冬に対応）の４象が生れ，更に乾・坤・震・巽・坎・離・艮・兌（天・地・雷・風・水・火・山・沢の象徴）の８卦と成り，８卦を相重ねて派生した64卦が方位・自然・身体・家族・性情・徳目等に当てられ，**哲学・倫理・政治等の説明が付加され原理にまで昇華している**。１ヵ所の本源から分れた２大勢力の陰・陽は，更に其々「少・老」の対を持ち，次に４組の対から成る８卦が誕生した。１→２→４→８という倍毎の逓増は，中国語で「翻一番」（２倍増）→「翻両番」（４倍増）……と言う倍々遊戯を連想させる。

「改革・開放元年」（1979）の翌年１月16日に，鄧小平は党中央が招集した幹部会議で，工・農業総生産の20年（1981～2000）「翻両番」の構想を打ち出した。彼は1978年10月の初訪日で近代化に開眼し日本の高度成長を手本としたので，60年12月に池田勇人内閣が決定した翌年から10年間の「国民所得倍増計画」も参考に為ったかも知れないが，農・工業が発達する湖北で80年初めから推進された同省の「20年翻両番」が下敷きである[1)]。10年掛りの倍増に比べて期間・増幅とも倍に当るこの計画は，**長い「跨度」（スパン）**を設定し持続的な疾走を強行する処が中国らしい。「翻一番」を飛ばした「翻両番」は貧困脱出の「翻身」（立ち直り）の必要性と共に，「太極」→「陰・陽」→「少陽・少陰／老陽・老陰」の加速度的な伸長に合致する。

この４象に当る４季は「少／老」の対で「春・秋／夏・冬」の順に成るが，齢が若くて将来に長い年月を持っていることに言う「年富春秋」（春秋に富む）の「春秋」は，陰・陽の領分で「少」の部類に入る点も若さを形容する理由として考えられる。日本は結局６～７年で実質国民総生産，１人当りの実質国民所得の倍増が実現し，1960年代の成長は青写真を大きく上回って驚異的な約４倍増に達した。中国は予定より５年早く国民総生産「翻両番」を達成した後，１人当りの国内総生産が4 000ドルという鄧小平が87年４月に言い出した2030～50年の目標[2)]は早くも

2010年に遂げられ，その倍の8 000ドルも2014年頃に届いた。[3] この32倍増とは平均毎年前年度比10.9％強増の速度を34年間も続けて来た事を意味するが，1960～70年の日本の同14％程と同様に少壮の頑張りの結果と言える。

五輪（オリンピック）開催の夏・冬の「**老陽・老陰」は経済の過熱・泡沫（バブル）と蕭条・衰微にも符合する**が，2020年の1人当り国民所得を10年前の倍に増やすという習近平体制の公約は，利殖の「72の法則」（年複利［％］×倍増に至る年数＝72）に由って7.2％の年成長率の継続が前提である。減速の「新常態（ニュー・ノーマル）」の中で政権の**興亡に関る「栄枯線」（好況・悪化の分岐点）**を巡る攻防の行方はともかく，毎年7.2％増え続ければ10年で元本が2倍に成るという複利効果は凄い。20世紀最大の物理学者アインシュタインは複利の考えを人類最大の発見としたと言われるが，倍々遊戯（ゲーム）の爆増の威力を物語る「西洋将棋（チェス）盤の法則」は桁外れの超絶さを持つ。64の枡（ます）に順次1→2→4→8→16→32→64→128……の米粒を置いて行くと，最後の枡では1 844京6 744兆737億955万1 616という天文学的な数字が現れる。『易』の1→2→4→8の次に16でなく64が出るのは倍毎（ごと）を超える2乗毎（ごと）の逓増であり，2の4乗への飛躍は**対を設けその対を追加し更に既有の対に対応する対を派生して行く**。その算数級的な増加と次元を異（こと）にする幾何学数級的な膨脹から，**中国的な無限伸張の強迫観念と貪欲さ**が読み取れる。

「万変不離其宗」（万般の変化をしても根本から離れまい）と言う様に，**「対」の思想や陰陽哲学の基本原理は相異・矛盾の物事等の相剋相生である**。古代中国で道教の表徴と為った「太極図」には，万物の根元・宇宙の本体を為す太極の内の陰・陽共存の有り形（かた）が巧く表されている。白・黒の勾玉（まがたま）を組み合せた「陰陽魚」（図の別称）の見立てに於いて，陰を表す右上～中央下方の黒は濁った気が下降し地と化すことを意味し，陽を表す左下～中央上方の白は清い気が上昇して天と化すことを意味する。左右・上下対称の両方の「魚」の細い尾⇔太い胴体⇔大きい頭の姿は，意気や領域が風船の形成の様に段々と膨らんで行く様にも見えるし，逆に活力や生命が次第に萎縮・衰微の途を辿って行く様にも解釈できる。黒い方の頭部に有る目の様な白い丸と白い方の内の対応する処の黒い丸は，陽を呑み込んだ陰には陽が少し残り，陰を呑み込んだ陽には陰が少し残るという相互内包関係の点睛であり，**陰が極まれば陽に変じ，陽の極みが陰に転じるという反転の無限反復**を示唆する。母胎の中の嬰児の様にも映る両方の図形は又，男女の合体（がったい）で子供が生れ，夫婦と交錯する親子の対が出来る事を連想させる。**自然界・人事界の諸般の現象の「懐胎・出産・育成」は，正に陰・陽の対立・統合の「互動」（相互作用）の結果である。**

大韓民国では中華人民共和国建国（1949. 10. 1）の2週間後に，李氏朝鮮の高宗時代の1883年に制定された国旗「太極旗」を国旗に採用した。『易経・繫辞伝』の「太極→両儀→四象→八卦」の宇宙生成論に基づく構図であるが，中国の「先天太極図」と違って先ず黒・白で配色される陰・陽は青・赤で彩色され，「太極円」に含まれる天地未分の中の両儀は上・下（赤・青）に配される。又「陰中陽」「陽中陰」を表す魚眼が無く，当該部分が表す坎・離の卦を同じ8卦中の正4卦の最初の乾・坤と共に，白地の中央の太極文様（もんよう）の周りの4隅に向き合う形で分布され，右上の乾と左下の坤，左上の坎と右下の離の2対が其々天・地の無窮，月・日の光明の精神を表す。蒙古（モンゴル）国の国旗にも人民共和国時代（1924～92）以来ずっと小さな「陰陽魚」が有るが，倶（とも）に黄色（40年以前は同じ赤地の中の青）で魚眼付きの左右対称の2側は，1つの円の内にくっ付くのではなく間に隔たりが有る。太極図はこれ程（ほど）中華文化圏で深遠な影響を持っているが，両国の国旗

の意匠と違う**渾然一体の神秘性や白黒の正反対・陰陽の相互内包が，中国人の考え方の根本であり中核である「対」の発想の特徴**として浮彫にされる。

「対」の思想の要諦：表裏交錯の相対性・超然冷徹な客観性・反復循環の無限性

中国文学者・作家駒田信二は評論「対の思想——あるいは影の部分について」（『新潮』1964年9月号）の中で，近世の大衆文学の傾向や受容等を切り口に日・中文化の相異を考察した。日本人が痛快な武勇譚として楽しむ『水滸伝』は中国では悲壮な英雄悲劇とも見られ，108人の英雄は正岡子規が言う「無邪気な人間」ではなく忠臣・豪傑として語られており，彼等は随分残虐な事も非道な行為もすれば弱さ・脆さ・醜さ・愚かさも露呈し，色濃く「影の部分」を持っていると喝破した。大衆の好む説話がその好む方向に向って膨れ上がって行く場合，**「影の部分」を削り取る日本流に反して中国流は「影の部分」を付け加える**のである，と指摘した上で「対」に対する次の思索を披露した。

> 松柏、花鳥などという併立的な対ではなく，是非、善悪、美醜などのいわば対比的な対である。たとえば，善と悪とを対立させるとする。そのとき，対立させた善は，あくまでも善として，内包する他の要素をみとめることをいさぎよしとしないのが，日本の大衆一般の観念的な好みなのである。「武士道とは死ぬことと見つけたり」という。そこには死に対立すべき生は考えられていない。強いていえば，死が即ち生だということになる。ここには対の思弁はない。だが，中国の〈対の思想〉はそうではない。対立させた善と悪とは，同じ比重において眺められるのである。そして，その善と悪とのそれぞれのなかにさらにまた善と悪とを見る。そしてまた，その善あるいは悪のなかに，さらに対を見る。いさぎよいことを好む日本の大衆一般は，このような思考の，くどさ，ねばり強さを好まない。[4)]

著者の慧眼で見抜かれた**中国の「対」の思想の要諦として，相対性・客観性・無限性の3点が挙げられる**。太極図の寓意と為る此等の特質を日本的な感覚と照らし合せれば，**中国人の思考様式・行動原理の機微・奥義**をより深く洞察できる。

松柏・花鳥等の並立的な対と違う是非・善悪・美醜等の対比的な比が焦点に当てられたが，中国的な発想で更に敷衍するなら，**並立・対比も対比的な対を成し，並立的な対も対比の上に立つ**ものである。『広辞苑』第6版（＝現行版［本稿では特に断りが無い限り辞書の引用は現行版に拠る］。新村出編，岩波書店，2008）の語釈では，【松柏】は「①常緑である，松と柏。また，広く，常磐木。②転じて，操を守って変えないことにたとえていう語」，【花鳥】も「①花と鳥。花または鳥。自然の美の代表。②花を見，鳥の声を聞く風雅な心」の両義を持つ。何れも具象と抽象の組み合せに対が見られ，仮名で表記した「又」「又は」が「対」の字形に含まれるのも興味深い。尤も，「松柏」の常緑の姿と節操の見立てとは「不易」の共通項を持ち，「花鳥」の風物の優美と精神の優雅とも繋がるので，**同質に近い両者が左右同形に近い「比」を含む対比の関係に在っても，反対の立場に立って張り合う対立には成るまい。**

「対」の思想の相対性・客観性・無限性を集約した例として，「禍福は糾える縄の如し」と「人間万事塞翁が馬」が思い当る。前者は司馬遷著『史記・南越列伝』の「因禍為福，成敗之転，

譬若糾墨」（禍に因りて福と為す。成敗の転ずる，譬えば糾墨の若し）に由来し，禍が福に成ったり福が禍の元に成ったりして，幸・不幸は縄を撚り合せた様に表裏を為す物だという意味である。後者は漢代の淮南王劉安が学者を集めて作った『淮南子・人間訓』の寓話で，「禍福之転而相生，其変難見也」（禍福之転じて相生ずるは，其の変見え難き也）等の道理を説く。国境の塞近くに住む占いの巧い翁は，自分が飼っていた馬が胡の国に逃げた事で近所の人が見舞うと，これが何故福と為らないだろうと言う。数ヵ月後にその馬が駿馬を連れて帰って来たが，人々の祝福に対して老人は，これが何故禍と為らないだろうと言う。その家では多くの良馬に恵まれ，その子が騎馬好きの故に馬から墜ちて足を折ったが，人々の慰問に対して老人は，これが何故福と為らないだろうと言う。1年後に胡の侵攻に対する抗戦で若者たちは10人中の9人が死んだが，独りだけこの子は足が不自由だった為に戦わずに済み，親子共々命を保った。

中国で「塞翁失馬，焉知非福」（塞翁馬を失う，焉んぞ福に非ざるを知らん）という熟語で知られるこの話は，「故福之為禍，禍之為福，化不可極，深不可測也」（故に福之禍と為り，禍之福と為る。化極む可からず，深測る可からざる也）と結ぶ。不測の事態・事故と望外の収穫・僥倖の**反転・相生の連環は，表裏交錯の「怪圏」（メビウスの帯）**の様相をも呈す。塞翁は禍の中の福，又その福の中の禍，更にその禍の中の福を見出したが，時間を延長させれば禍→福→禍→福……と続いて行く展開も考えられる。**「対」の思想の相対性は硬貨の両面の表裏一体の同居にも似ており，無限性は陰陽8卦の相生・相剋の反復・循環に根源が在り，客観性は占術の巧者塞翁の超然たる眼光と冷静な判断に体現されている。**

日本は日清戦争（1894）と日露戦争（1904～05）を制し，中国・露西亜の2大国に恐れられる程の亜細亜の覇者と成ったが，快勝の戦果に由って深めた自信は野望の膨脹と暴走の自滅を招き，破竹の勢いが余って戦火を拡げた結果竹篦返しを食らった。日中全面戦争への突入（37）に続いて対米・英開戦（41）を敢行し，遂に泥沼に嵌り果てには米国・中国・英国・ソ連の最後通牒を受諾した（45）。その降伏は又日本語で同音の「幸福」に繋がり，戦争への反省から平和国家の道を歩み今日に至った。同じ敗戦国の西独に次いで世界2位の経済大国に成った（68）のも，「日本が一番」と囃された80年代の末に絶頂に達した泡沫経済の破裂も，**禍福・栄辱の入れ替え**の1環と見て能い。

中国は抗日戦争で「惨勝」（悲惨な代償を払った辛勝）を収めたが，この中国独特の単語の正・負の両面は後の国際連合常任理事国の地位の獲得（1945）等と，国民党・共産党の内戦（46～49）や「文化大革命」（66～76）等で現れた。毛沢東が認めた「一窮二白」（一に窮乏，二に［文化的］空白）の現状を変えるべく，改革・開放への路線転換が行われ先進国への猛追が続いた。その奮起が報われ2010年に日本から世界第2の経済大国の座を奪ったが，翌年の温州高速鉄道脱線・転覆特大事故（中共建党90周年の7月23日）を境に，表面的な繁栄の下の歪みが一気に噴出し社会の不安定が次第に増幅した。習近平が抗日戦争・世界反ファシズム戦争勝利70周年を祝う「9.3」大閲兵に臨んだ15年には，政争激化・株式市場崩壊が起き独り子政策の廃止や中成長への切り替えを強いられた。**この様な起伏は人類が存在する限り永劫に繰り返されて已まない**であろうが，中国の「硬実力」増強と拮抗する「軟実力」が健在する日本でも**盛衰の循環**が見られる。

景気循環・相場波動の周期や節気に見る「少陽→老陽→少陰→老陰」の展開

景気循環の短期、中期、長期、超長期（約４年、10年、20年、50～60年）の波動として、提唱者の名に因んだキチン循環、ジュグラー循環、クズネッツ循環、コンドラチェフ循環が有る。其々在庫投資、設備投資、建築活動、技術革新の集団的な発生等に起因する４つの波は，日本では20世紀以来1904年、57年に次いで2014年に再び揃って上向きに成った。１回目は日露戦争を経て第１次世界大戦（14～18）中の16年辺りまで景気が拡大し，２回目は神武景気（56～57）、岩戸景気（58～61）、東京五輪（64）を挟んで伊弉諾景気（65～70）の中盤の67年まで続いたが，三菱 UFJ モルガン・スタンレー証券の嶋中雄二景気循環研究所長はこの大きな転換点を根拠に，同年進行中の日本株の上げ相場は2020年辺りまで続き歴史的な大相場に成る可能性が有ると予想した。[5]「安倍経済学相場」始動（12. 11. 15）の翌年に日経平均株価は1991年以来上抜けなかった上値抵抗線を突破し，2015年３月に1989年末の大天井（12月29日の38 915円［銭単位は切り捨て］）以来初めて前回の中期天井（07年７月９日の18 261円）を上抜いたので，吉野豊（SMBC 日興証券チーフテクニカルアナリスト）は09年３月10日の大底7 054円からの上昇波動を，明治～大正の「大勢上昇第１波」（1890～1919），昭和の「大勢２段目の上昇波動」（1950～89）に続く「大勢３段目の上昇波動」と位置付けた。前の39年間、49年間に対して今回は2030年代までの継続が有り得るとした一方，相場の中期波動は８～10年程続く事が多かったので中期的には18年後半頃までで一旦頂点に到達すると見た。該当範囲の17～19年の間のこの時期の理由として挙げられたのは，347ヵ月、187ヵ月、134ヵ月周期という重要な長期循環過程の節目の重複で基調変換が生じ易い事や，五輪開催国では五輪に向けて強気相場に成るが開催年の１～３年前に天井を打つ事が多いという経験則である。[6]此等の**経済・株価の周期的な循環過程や節目毎の基調転換は，陰陽哲学や「対」の発想で説明できる処が少なくない。**

中国最大の金融商品取引所である上海証券交易所は，日本初の公的な証券取引機関である東京株式取引所より13年遅い1891年に設立された。日本では戦中・戦後の機構改組・解散を経て1949年４月１日に東京証券取引所が発足したが，半年後に成立した中共政権の下で90年12月19日に漸く上海証券交易所の再設立が実現した。日本株の歴史的な「大勢上昇第１波」の２年目に当る前身の誕生に対して，泡沫崩壊開始の平成２年の末の立ち上げは日本の下降趨勢と対照的な上昇気運を見せた。中国株の代表指数である上海証券総合指数は当初の100点から１年半で劇的に1 000点を突破し，2007年10月16日に6 124点（小数点以下は切り捨て）の史上最高値を付けた。世界的な資源泡沫や同月の第17回党大会（15～21日）が背景に有る時機は，北京五輪（08. 8. 8～24）の前年に当るので，2020年東京五輪を意識した18年後半の日本株反落の推論の裏付けにも成る。株価は将来を織り込み投資家も理想買い→現実買いの次に先手で利益確定し勝ちなので，五輪の様な盛事到来の前や株価の大台乗りの前後に熱気が冷めるのは情理に適う。現実の景況・企業業績等が芳しくない中で回復への期待から株を仕込む理想買いは，悪化の暗い現状から改善の明るい未来を見出し夢に賭ける積極的な投資行動であり，足元の経済・企業の実態や株価の適正水準・配当利回り等に基づいて現実買いは，恰好の好い冒険に潜む失敗の恐れを警戒し勝

率の高い方を選ぶ堅実な投資行動である。其々「高風険・高回報」「中風険・中回報」「低風険・低回報」に徹する選好も有るが，個人の手法や個別銘柄の選択を超えて株式市場では屡々理想買いで先ず盛り上がり，軈て「軈」の字形で連想される「身丈に相応」の現実買いが優勢を占め落ち着く様に成る。世界で最も哲学的な国旗と思われる韓国の「太極旗」の「陰陽円」の赤・青の暖・寒２色は，**昇騰を目指して空を飛ぶ浪漫派と漸進を図って地を這う現実派**の姿にも似合う。０時～24時の間に深夜→未明→朝→昼→夕方→晩と移り変る１日の内中の**日の出→日没の様に，理想先行の離陸→現実順応の着地の流れは自然の摂理に合致する**。

米国で大型投資資金を独りで運用し長年の驚異的な成績を残した大竹慎一は，『あなたが株で勝つための株式投資100の答え』（フォレス出版，2000）の中で，相場の１年は西暦の７曜表とは関係が無く太陰暦と深い関係が有ると主張した。太陽暦の９月末に始まる猶太暦や東洋の太陽暦の合理性を説き，日本の相場年は暦年や財政年度と無関係のお盆明け～翌年７月22日であるとした。６月末に集中する株式総会に伴う化粧買い（運用機関が保有株の月末や決算期末の評価額を高く見せる為の買い）と，８月の高校野球・盆休みに由る閑散が終点の日の中途半端さの理由とされたが，[7] ７月22日は当時23日に次いで大暑に当る年が多い（曾て24日も有った）ので興味深い。**24節気の内の大暑は年中１番暑いとされ株式市場過熱の頂点の象徴として妙味が有り，お盆明けも中国の春節（旧正月，１～２月）明けと同じく帰省の民族大移動が終るし，「老陽」の夏を過ぎて「少陰」の秋に入るので再出発の季節に相応しい**。「１年の計は春に在り」という中国由来の諺を体現する様に日本の財政年度は４月１日に始まり，国内投資機関の新年度の資金投入で４月の日本株は上昇し易いが，米国では９月初旬の休日の後に市場が活発化し始め秋の陣が第１の相場を為す感が強い。「ハロウィン辺りに買って４月（又は５月）に売れ」という西洋の相場訓が有り，大竹も10月末から玉（取引対象の証券）を仕込み翌年の黄金週間辺りに利食いし好結果を出した。日本株でも日経平均の月次基準で測る2000～09年の間の投資成果の１位が，10月末購入→翌年４月末売却の場合が平均＋36％（２位は同11月末→４月末の＋35％）である。[8] ４月末に跨る黄金週間は春～夏の交（５月５日又は６日の立夏）に当るから，盛夏到来の前に手仕舞って置くのは「腹８分目」を好しとする投資の良識に合う。

太陽年を太陽の黄経に従って24等分して季節を示す節気は中国古来の概念であり，その**名称にも４季各々の６節気の内及び「少陽 vs. 少陰」「老陽 vs. 老陰」の間の対が見られる**。春の立春・雨水・驚蟄（日本語では「啓蟄」が一般的）・春分・清明・穀雨の中で，前半と後半の始まりの立春と春分は「春」を含み，秋の立秋・処暑・白露・秋分・寒露・霜降の中の１番・４番の両「秋」と対を成す。夏の立夏・小満・芒種・夏至・小暑・大暑と冬の立冬・小雪・大雪・冬至・小寒・大寒には，同様の対だけでなく「小・大」の対を其々１組、２組持ち「至」の対も有り，この２季の**「暑・寒」の「小→大」は４季の「陽・陰」の「少→老」とも符合する**。春・秋・冬に各２回出る「雨」「露」「雪」は秋の霜降とも通じて字面に降水の意が現れ，清明も「清」の部首（三水。中国語＝「三点水」）と降雨の確率の高さで同じ属性を持つ。唐代の杜牧の７言絶句「清明」の「清明時節雨紛紛，路上行人欲断魂」（清明の時節雨紛紛，路上の行人魂断たんと欲す）には，「露」を構成する「雨・路」が奇妙にも入っている。秋の節気の２番目の処暑と後ろから２番目の寒露は字面でも其々夏・冬と繋がるが，抑々立秋は2008年のこの日（8. 7）の翌日に夏季五輪開会式が行われた時の北京の様に，中国でも日本でも大半の地域が酷暑に見舞われる

事の多い頃に在る。**「少陰」に於ける前・後の「老陽」「老陰」の投影は又「陰陽魚」の様相を呈す**が，残暑が漂う処暑（概略日付［以下同じ］＝8. 23）は正に大竹説の「相場年」初頭のお盆明けの直後に当り，深秋の気配が訪れる寒露（10. 8）は1998年10月７～８日の国際金融市場狂乱の期間中である。

現代中国政治の節目の裏の「陰・隠・引・因」（陰暦の隠然たる引力と因縁）

日本・世界の経済と対を成す中国政治にも節気の辺りの変易・波動が度々見られており，清明（4. 5）を例にすれば75年のこの日に台湾国民党政権の統領蒋介石が死去し（歿年87），翌年の同日に第１次天安門事件（群衆の追悼・示威集会と当局の強行排除）が起きた。中国で先祖への墓参りが集中的に行われる清明節のその事変の契機は，西暦年で初の節気に当る小寒（1. 6）の翌々日に病没した周恩来総理（77）への追悼である。半年後の小暑（7. 7）の前日に「赤軍の父」で全国人民代表大会常務委員会委員長（国会議長）朱徳（89）が逝き，続いて白露（9. 7）の翌々日の０時10分に党・国・軍の領袖・統帥毛沢東（82）が亡くなった。翌月の寒露直前の６日の極左「４人組」逮捕で「文化大革命」の災難に終止符が打たれたが，80年代の最高実力者鄧小平は97年の雨水の日（2. 19）に天寿（92）を全うした。周恩来生誕80周年（78. 3. 5）から全人代全体会議の開幕は略（ほぼ）この日に固定されて来たが，３月５日又は６日の驚蟄は大地が暖まり蟄（冬籠りの虫）が地中から這い出る意なので，開国宰相を記念する為に設定したこの時機は新気象の醸成に相応しい吉日でもある。同年12月18～22日の第11期党中央第３回全会で改革・開放路線が採択されたが，閉幕日が冬至に当る事は和製成語の「一陽来復」の寓意を絵に描いた様な妙が有る。

『日本国語大辞典』第２版（日本国語大辞典第２版編集委員会・小学館国語辞典編集部編，正文［以下同じ］全14巻，2000～02）の当該項目は，「《名》①陰が窮まって陽にかえること。陰暦一一月または，冬至をいう。《季・冬》②冬が去り春が来ること。新年が来ること。③悪い事が続いたあと，ようやく好運に向かうこと」という多義を示している。小型の『新明解国語辞典』第７版（山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之編，三省堂，2011）にも収録された熟語であるが，『漢語大詞典』（羅竹風主編，全13巻，［上海］漢語大詞典出版社，1986～94）には「一陽」の項目も無い。同じく自国最大規模を誇る『日本国語大辞典』の【一陽】では，「《名》①易でいう陽の気。一陽来復。②冬が去り春が来ること。新年が来ること。また，逆境のあとに好運が向いて来ること。一陽来復」の両義に，其々「易経-繫辞上“一陰一陽謂二之道一，継レ之者善也，成レ之者性也”」「杜牧-冬至日寄小姪阿宜詩“今日我江外，今日生二一陽一”」という漢籍出典が有る。中国で「一陽」が単語と成り難いのは「一陰」との対が普通である事も考えられるが，「～来復」の母体と言える『易』の陰陽の道は又悪運・幸運を表す「否・泰」の卦辞から，「否極泰来」（否が極みに達すれば泰が巡って来る）という格言を生み出している。

1992年の鄧小平「南巡」（1. 18～2. 21）後の改革・開放再点火で株式市場が上昇気流に乗り，上海証券指数は１日0.5％以上の騰落に由る個別銘柄の取引停止とする値幅制限の撤廃で，５月

21日に前日終値の617点から一気に倍増の1 266点で初めて1 000点を超えたが，当日が当る**小満の草木が周囲に満ち始める意は鬱勃・繁盛への幕開けに妙に符合する**。小満直前の「5. 20」は49年と89年には台湾と北京部分地区が戒厳令下に突入した日と成り，蒋介石の中華民国初代総統就任（48）を前例に台湾の「総統」就任日とも為って来たが，**変化乃至波乱を孕む感じ**のこの節目と照らして亜米利加合衆国大統領の就任日を見ると，37年のルーズベルト再任を初めに定例化した「1. 20」は大寒辺りなので奇妙に思われる。ワシントン（初代）再任（1793）～ルーズベルト初就任（1933）の間の3月4日の定番は，巡り巡って改革・開放後の中国「両会」（全人代・全政協年会）開幕の驚蟄頃と重なるので，寒冷の真っ最中に当る米大統領就任日の新慣例に違和感を覚える中国人の皮膚感覚には合う。日中戦争勃発の年に始まった「1. 20」は恰も冷戦時代を先取りしたかの感も有るが，大寒と対蹠に在る大暑は奇しくも中共第1回全国代表大会（上海→嘉興）の初日（21. 7. 23）である。毛沢東等の出席者の記憶の齟齬で特定できない日付は38年に毛の判断で「7. 1」とされ，79年に究明された後も西暦基準・便宜主義に由る「党慶」（建党記念日）は変っていないが，初回党大会の第2会場が在る浙江省で2011年の大暑（7. 23）に起きた温州高速鉄道事故は，**中国の政治・社会の陰に見え隠れする旧暦の節奏や季節感の神秘な働き**を再び示した。[9)]

東京五輪（1964. 10. 10～24）は処暑の翌日（8. 24）に終った北京五輪と比べて，寒露の翌々日の秋晴れの中で開会し霜降の翌日に閉幕した処は「夏季」の名と乖離した。一般的に6～8月を指す夏は陰暦では立夏（5. 6）から立秋までの3ヵ月（4～6），天文学上では太陽が夏至（6. 21頃）点を通過して秋分（9. 23）点に来るまでの期間を指す，と『広辞苑』の【夏】の語釈は3つの基準を併記しているが，同じく自国で被引用度が最も高い辞書の『現代漢語詞典』の第6版（中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編，［北京］商務印書館，2012）では，【夏季】は我が国では習慣として立夏～立秋の3ヵ月を指し，農暦4・5・6の3ヵ月をも指すと言い，【立夏】も我が国では習慣上立夏を夏季の始まりとすると説明されている。08年5月6～10日の胡錦涛国家主席の訪日を「暖春の旅」と呼ぶ中国の媒体の形容は，この時期を初夏と見做す両国共通の常識に反して季節外れの可笑しさを感じさせるが，2つの概念規定から窺える様に**中国の季節の区切りは今も旧暦の発想が優勢を占めている**。【二十四節気】の語釈は最後に「気候の変化と農事の季節を表し，農業生産に於いて重要な意義を持つ」としたが，日本の代表的な国語辞書に無いこの価値判断は農業が経済の基礎と為る国柄を示している。【夏季】の基準の枠組から除外された西暦は中国で「公暦」「陽暦」とも言うが，対義語の「旧暦・陰暦・農暦・夏暦」の中で「農暦」は日本語には入っていない。『日本国語大辞典』の【農暦】は「《名》毎年行なうべき農家の仕事」の意で漢籍典拠の無い和製漢語とされており（唯一の出処は「帰省［1890］〈宮崎湖処子〉三」），『広辞苑』等では最早遺物としても陳列される事が無い。【夏暦】（語釈＝「中国の夏［か］の朝廷で行われたとされる暦法。その年初は今の陰暦と同じく寅の月にあたる」）も，『本朝文粋』（1060頃）等3点の和文用例と『後漢書』の出典が有るが『広辞苑』等には無い。起源と為る最古の王朝の名に因んだ夏暦が別称である中国の旧暦・陰暦・農暦は，猶太暦と同様に太陰（月）の満ち欠けを主として太陽の運行を合せ考えて作った物である。共産党中央機関紙『人民日報』の1面の日付は西暦・農暦の併記と為り，中央電視台の全国合同報道番組の冒頭で当日の西暦・旧暦の日付を放送するが，1872年に新暦（太陽暦）を採用した日本では旧暦（太陰太

陽暦）は廃れて久しい。世界１の発行部数を誇る『読売新聞』では朝刊の地方報道面の「あすのこよみ」欄に，（2015年）「27日（金）／先勝／旧暦／10月16日」という風に記載される程度である。**「脱亜入欧」の結果「陽」で「陰」を駆逐したのも「影」を削り取る事の変種**と思われるが，報道番組では「暦の上では立春ですが，まだまだ寒いです」等と節気を取り上げたりするので，**陰暦は日・中両言語の「陰・隠・引・因」の同音**（中国語＝yin）**が示唆する様に，月の月並みならぬ隠然たる引力・影響力・支配力の投影**（和製漢語）**を実感させる。**

異変を齎す「黒白鳥」の脅威と「陰陽魚」の眼の「陽中陰・陰中陽」を成す反転

大竹慎一は『日経平均4 000円時代が来る』（フォレス出版，2005）の中で，12～15年の日本は株・国債暴落と金利暴騰に見舞われると予言した[10]。然しその後の10年間の展開では，株価は１度だけ取引時間中に一瞬7 000円台を僅かに割れた事が有り，15年２月19日に終値18 264円で07年７月９日の高値（18 261円）を抜き，情報技術泡沫期の00年５月以来の高値を記録し，更に４月22日に表題の超安値の５倍に当る２万円を15年振り（00. 4. 14以来）突破した。日本国の債務は05年の800兆円台から15年の1 000兆円台に増え，政府債務残高の国内総生産に対する比率で09年から世界最悪の座を抜け出せていないが，長期金利（指標＝新発10年物国債利回り）は05年の1.5％台から預言の４～５％にまで上昇するどころか，１度も２％台に乗らず15年１月20日に0.195％の史上最安値に沈み，金利と逆相関の関係に在る国債の価格は泡沫と見られる水準で更に上がった。日本銀行が13年４月４日から従来の政策の枠組を大きく変えて行った金融緩和の「異次元」は，劇薬依存の新常態を作った「安倍経済学」の形振り構わぬ荒療治の異常性を言い得て妙である。現れても可笑しくない地獄絵は安倍政権に由って回避されたから預言が外れたとも思えるが，大竹は14年も『ウォール街から日本を見れば　2015世界大恐慌の足音が聴こえる』（徳間書店）の中で，15年に堰き止めていた歯止めが外れる中国経済の崩壊で日本は世界の何処よりも衝撃を受け，当然株価は暴落し日経平均4 000円が視野に入って来て遠からず実現するはずである，と長年の持論への固執を見せた[11]。翌年には年央の中国株の泡沫破裂で確かに一時世界的な連鎖安が起きたが，短期的な急落で９月29日に一時付けた日経平均株価の16 901円は尚年初来安値（１月16日取引時間中の16 582円）より高いし，崩壊の予見が半分当った中国でも株式市場は立ち直り，11月５日の上海証券総合指数終値3 522点を以て８月26日の底値（同2 927点）を20％余り上回り，弱気相場を脱し上昇基調に転換する兆しが見えた[12]。「来年の事を言えば鬼が笑う」という日本の熟語に照らせば意地の張り過ぎも感じるが，**世界が益々「混沌」に包まれ「黒白鳥」の様な変異も珍しくない**ので大目に見た方が可い。

欧州で白い鳥だけと信じられていた白鳥は1697年に濠太剌利で白い種類が発見され，全体黒色で風切羽は純白，嘴は深紅色のこの異種（日本語の通称＝「黒鳥」）は，現代では市場に絶大な衝撃を与える想定外の極稀の突発的・破壊的な事象の譬えと成った。レバノン出身の認識論学者タレブはウォール街での金融派生商品等の基金運用の経験を基に，警世の書『黒白鳥――奇天烈の衝撃』（2007）で所謂「黒白鳥理論」を首唱した。鳥類学者の常識を覆した発見から名付けられたこの学説は，確率論や従来の知識・経験では予測できない極端な異常事態の発生と

影響を論じるもので，金融派生商品裁定取引等の担当・統括の経験に裏打ちされた説得力が有る。有り得ないと思われる急変は冷戦終結後に地球環境・社会安全の面で多く現れており，処女作 *Fooled by Randomness: The Hidden Role of Chance in Life and in the Markets*（偶然が齎す愚――人生・市場の機会の隠れた法則。日本語版は望月衛訳『まぐれ――投資家はなぜ，運を実力と勘違いするのか』［ダイヤモンド社，08］）が刊行した01年に，世界の金融中心紐育と米国の首都華盛頓で商務施設・国防総省庁舎等への同時多発恐怖襲撃が起ったし，金融取引の第１線で活躍中（1980年代～2004）も引退後も地球規模の金融危機に見舞われた。タレブが運用会社を退職し自ら金融基金を立ち上げる前年（1998）の例として，米ドルの対円相場が10月７日の132円台から翌日に111円台まで暴落した。過去20年来最大の振幅は米国の危険性回避型投機基金の反対売買の清算に由るもので，純資産の25倍も動かす梃の怪力は不本意な巻き戻しを強いられた時に自滅の凶器と化した。97年の亜細亜通貨危機・98年の世界金融危機の其々10年後に，世界の資源泡沫崩壊と欧・米発のリーマン衝撃が発生した。100年に１度と言われる08年の世界的な恐慌は中国で「金融海嘯（津波）」と呼ばれたが，**自然災害の「黒白鳥」として**同年に日本の流行語・新語１０傑入りした**「ゲリラ豪雨」が思い当る**。短時間の猛襲を受けた局地は周辺地域と比べて異常気象の悪戯の被害者と言えるが，**「黒白鳥」と字面で対を成し水・水鳥の接点を持つ「陰陽魚」の「陽中陰」の魚眼が思い泛ぶ**。

日本語の「黒鳥」の別称には「黒白鳥」と共に「黒鵠」も有るが，『日本国語大辞典』では『広辞苑』の「くろ-はくちょう【黒白鳥・黒鵠】」（=「コクチョウの別称」）で併記されたこの語は見当らない。「こく【鵠】」の「《名》1“ハクチョウ（白鳥）”の漢名。2弓のまとの中央の黒い星。ほし」の両義は，其々「荘子-天運」「周礼-天官・司裘」の用例が付いている。中国語の「鵠」（hú）は「天鵝」（白鳥）を表す文章語であり，『現代漢語詞典』の当該項目には子見出しの【鵠立】（＝直立する）・【鵠望】（＝直立して眺める。頸を長くして待ち望むことの形容）が有る。同形異読（gǔ）の別項の「鵠」は矢の的を指す文章語で，子見出しの【鵠的】は「矢の的の中心。射撃練習の標的」「目的」の両義である。『広辞苑』ではこの意を含む「正鵠」の項が有り，「（セイコウは慣用読み）［礼記中庸］①弓の的［まと］の中央の黒ぼし。②ねらいどころ。物事の急所。要点」と説明され，慣用語【正鵠を得る】も付いている（語釈=「核心をつく。“正鵠を射る”とも」）。『日本国語大辞典』の語釈は，「《名》（“正”は鳥，正［鴟鳥］を描いた革の的。“鵠”は鳥，鵠［くぐい］を描いた革の的。一説に正は正しい，鵠は直［すぐ］の意とも）1弓の的。的のまんなかにある黒点。くろぼし。2物事のかんじんな部分。要点。急所。また，めあて。目的。3（形動）物事の核心をついていること。また，そのさま」と為っている。「礼記―射義」の出典が付く1以外は和製語義であるが，この漢籍中の「失=正鵠=」の字・義に因んだ「正鵠を失う」「正鵠を失する」と共に，和製熟語の「正鵠を得る」「正鵠を射る」も【正鵠】の内に立項されており，『広辞苑』の上記②には用例の「―を誤る」も挙げられた。『漢語大詞典』の【正鵠】❶「箭靶的中心」（箭の的の中心）の説明でも，「《礼記・中庸》：“子曰：‘射有似乎君子，失諸正鵠，反求諸身。’”鄭玄注：“画布曰正，棲皮曰鵠。”陸徳明釈文：“正，鵠皆鳥名也。一曰：正，正也；鵠，直也。”（下略）」と異説が併記された（文中の下線は同辞書で人名・王朝名を表す記号である）。**「影の部分」を付け加える事で説話文学を膨らませる中国流は学問の領域に於いても，注釈や疏（注釈に対する注釈）で原典を発展させる形で好く現れている。**

根幹に分枝を添加し意味を転化させる派生・敷延は光に付く影とも影に当てる光とも言え，原義と転義，通説と異説の相互参照から更に疏の疏や新説乃至反命題が生れる事も儘有る。日本人の異質な発想に由る加工・再生産も中国の言語・文化を豊かにし広げて来たが，「正鵠」の黒星・黒点と「鵠」の字・義は和製漢語「黒鵠」を連想させる。

『日本国語大辞典』の【鵠】の内には，上記1の漢籍出典「夫鵠不二日浴一而白，鳥不二日黔一而黒」に由来した【鵠は浴（よく）せずして白（しろ）し】の項が有り，「（白鳥は毎日水を浴びなくとも常に白い，の意から）本性のよい者は，飾らなくとも自然にその性質のよさが現われるということのたとえ」と解説されている。『広辞苑』の【鵠】にも無いこの慣用句（『日本国語大辞典』の【鵠を刻［こく］して家鴨「あひる」に類［るい］す】と同じ【鵠を刻して鶩に類す】が有る）は，中国でも字形や字面に「白」が無い「鵠」「天鵝」（「鵝」＝鶩鳥）も「白鳥」（白い鳥）に属する事を示唆する。『漢語大詞典』の【鵠[1]】【鵠[2]】【鵠[3]】は其々上記の hú，gǔ と『現代漢語詞典』でも未採録の hè（＝同音・同声調の「鶴」）であるが，「鵠[1]」の❶（白鳥の通称）には「羽毛が純白。亦赤・黄色のも有る」と有り，❷は白色を形容する意味である。『広辞苑』の【白鳥】の「多くは全身白色」と通じる様に，中国の最も権威有る中型国語辞典の『現代漢語詞典』の【天鵝】でも，「多く見られるのは全身白色」と書かれているが，『広辞苑』の紹介に無い黒への言及として「脚が黒色」と付け加えてある。『日本国語大辞典』の「はく-ちょう【白鳥】」㊀2の説明は，「体は純白で，くびが長く，太い声を出す。コハクチョウ，大型種のオオハクチョウ，くちばし基部に黒色のこぶ状突出のあるコブハクチョウの三種がよく知られる」と，『広辞苑』『現代漢語詞典』と同じ3種類（中国語＝「大天鵝，小天鵝，疣鼻天鵝」）を例示したが，黒い白鳥（同＝「黒天鵝」）は稀少種類を割愛する為か出番が無い。和名に有る**白の潔い形象を保ち不純な異色を落す処理**の様にも思えるが，中国語の「天鵝」は字面が示す通り**「影の部分」を含む雑色が排除されていない**。「天鵝」は地上を歩く家禽の鵝の対として空を飛ぶこの野禽に命名されたのであろうが，『広辞苑』の【鶩鳥】の説明の通り「唐雁。鵝」（最後に記した異称）は「羽色は白色のものと灰褐色のものとがある」。

『日本大百科全書』（編集著作・出版者＝相賀徹夫，全24巻，小学館，1984～88）の「ハクチョウ〔白鳥〕」では，「七種があり，（中略）五種は全身が白色，クロエリハクチョウは頸のみが黒色，コクチョウは全身黒色で風切羽が白色である」と，白の中の黒も黒の中の白も出ている。「コクチョウ〔黒鵠・黒鳥〕」の「ハクチョウ類に属するが全身黒色のオーストラリア特産種」の後に，『広辞苑』の【黒鳥】の「全体黒色で，風切羽は純白」と同じ上記の表現を超えて，「初列風切と次列の外方羽だけが白色，（中略）虹彩と嘴は赤色，嘴の端近くに白帯がある」と，黒・赤混在の中の別の白の部分をも取り上げている。こうして観ると**「黒白鳥」には逆説・反転の様態を呈す哲学的な在り形が感じられるが，「黒白鳥」より「黒鳥」を規範とする日本的な感覚よりも中国的な「対」の発想と波長が合う**。*The Black Swan: The Impact of the Highly Improbable* に対する中国の関心の高さを示す様に，原著出版の13ヵ月後の2008年5月に中国語版（万丹訳『黒天鵝：如何応対不可知的未来』［黒白鳥：如何に不可知の未来に対応するか］，［北京］中信出版社）が出た。「翻訳大国」での日本語版（望月衛訳『ブラック・スワン——不確実性とリスクの本質』，ダイヤモンド社）刊行より13ヵ月早かったのも，「黒天鵝事件」「黒天鵝効応（効果）」等の新語が時々使われる様に成ったのも，**英訳題が *The Book of Change*（変化**

の書）と為る『易経』や太極図を生んだ老大国らしい。08年11月4日の米大統領選挙で史上初の阿弗利加（アフリカ）系・本土外（布哇（ハワイ））出身・1960年代出生者が勝ったが，1世代前に誰も予想できなかったこの「黒白鳥（ブラック・スワン）」の登場に繋がった合言葉の「**変化（change）**」**は，巡り巡って米国の最大の競合相手と成った「巨龍」の思考様式の奥義の点睛である。**

伝統的に多難な運命を背負う中国人の危険性（リスク）に対する敏感と「居安思危（やすきにおりてあやうきをおもう）」意識

『黒白鳥（ブラック・スワン）』では米国の感謝祭（11月の第4木曜日）に至るまでの七面鳥の飼育と結末を，1 000日に亘る過程の積み重ねも次の1日に就いて全く教えてくれないという原理の例にした。七面鳥は餌を貰（もら）う度に親切な人のこの行為が普遍的・恒久的な法則だと信じ込んで行くが，感謝祭の前日に思いもしなかった事が降り掛るとその信念は覆されるだろうと言う。餌をくれるその手に何時（いつ）か首を絞められるかも知れないという状況を指摘した著者は，1930年代の独逸（ドイツ）社会に融け込んでいた猶太（ユダヤ）人等に見られる「安心」の勘違いを教訓とした。餌を貰う回数に正比例して確信が高まり破局が近付いているのに安心感も高まって行くが，そんな安心感が一番高く成るのは危険性（リスク）も最も高まった時なのだという喝破[13]は，**太極図の魚眼状の「陽中陰」が持つ突然変異**の可能性を思わせる。安心感と危険性（リスク）の対を表す「安危」は『広辞苑』では，「安全か危険かということ。“一国の―存亡にかかわる”」と解釈・例示されている。『現代漢語詞典』の「㊀安全和危険。多偏指危険的一面：為了保護国家財産，消防隊員們置個人～於度外」（《名》安全と危険。多くはより危険の一面を指す。「国家の財産を守る為に，消防隊員たちは個人の～を度外視した」）は，日本語より高い使用頻度と共に**危険性（リスク）に対する中国人の格別な敏感**を示している。『日本国語大辞典』の同項目（語釈＝「《名》［“あんぎ”とも］安全と危険。安全であるか，危険であるかということ」）には，それを裏付けるかの如く異例にも漢籍典拠が2点引かれている（「＊史記-項羽本紀“国家安危，在二此一挙一”＊書経-畢命“嗚呼，父師，邦之安危，惟茲殷士，不レ剛不レ柔”」）。

『新明解国語辞典』初版（金田一京助・金田一春彦・見坊豪紀・柴田武・山田忠雄編，1972）でも，「安全であるか，危機が来るか。“国の―にかかわる問題”」という例文付きの項が有るが，関連の【安否】にはこれに無い重要語（約5 700）の記号＊（最重要の＊＊に次ぐ）が付く。その「㊀〔事件が起きた時に〕無事であるかどうか。“―を気づかう”㊁〔しばらく連絡が絶えている人について〕無事に暮らしているかどうか。“―を問う”」は，小型辞書ながら『広辞苑』の「無事かどうかということ。“―が気づかわれる”“―を問う”」よりも詳しい。『日本国語大辞典』の「《名》（“あんび”とも）1安らかであるか，そうでないか。安全か否か。興るか亡びるか。安心と不安。あんぷ。2（特に人の身の上などについて）無事か無事でないか。さらに，それを中心とした日常の様子，動静，消息などをいう。あんぷ。3あれこれと考えること。思案。あんぷ」は，2だけは漢籍出処「礼記-文王世子“朝夕至二于大寢之門外一，問二於内豎一曰，今日安否何如”」が有るが，和文用例（4点）の1番目（「太平記［14C後］一四・将軍御進発大渡山崎等合戦事」）は，和製語義の1の同3点中の初出（「明月記―治承四年［1180］五月三〇日）より遥かに遅い。2の形成に寄与した典籍（五経の1つ）の中のこの語は『漢語大詞典』でも立項が無

いが，**中国語で消えた事は対立軸が鮮明で危険を重く視る「安危」への選好と表裏一体を成す。**

日本語に入っていない中国の「安・危」の対を含む4字熟語には，「安不忘危」（安きに危うきを忘れず）・「居安思危」（安きに居りて危うきを思う）・「居安慮危」（安きに居りて危うきを慮る）・「処安思危」（安きに処して危うきを思う）が有る。「安不忘危」の出典は『易経・繫辞下』の「是故君子安而不忘危，存而不忘亡，治而不忘乱。是以身安而国家可保也」（是の故に君子は安んずるも危うきを忘れず，存すれども亡ぶるを忘れず，治まるも乱るるを忘れず。是を以て身は安くして国家は保つ可き也[14]）で，「居安思危」「居安慮危」「処安思危」は其々『左氏春秋伝・襄公十一年』『宋書・文五王伝・竟陵王誕伝』『楽府詩集・燕射歌辞三・隋元会大饗歌・皇夏』に由来した。『現代漢語詞典』には【居安思危】が収録されており（=「処在安定的環境而想到可能会出現的危難」［安定した環境に居て，現れ得る危難を想定する］），原典の下の句「思則有備，有備無患」（思えば則ち備え有り，備え有れば患い無し）の後半も項が有る（語釈=「事前有準備就可以避免禍患」［事前の準備が有れば災禍を避けられる］）。『日本国語大辞典』の同項目（『広辞苑』の【備えあれば患えなし】と読み方・表記が違う「～患無し」）は，「平生からいざというときの準備を怠らないでいる者は，万一の事態が起こっても，少しも心配の必要がない。＊書経-説命中“惟事事有レ備，有レ備無レ患”」と語釈・漢籍出典のみで，「そなえ【備・具・供】」の他の熟語（「―の旗［はた］」「―の六具［ろくぐ］」）の項に有る和文用例が無い。対して『現代漢語詞典』には長文の用例が付き，その「有了水庫，雨天可以蓄水，旱天可以灌溉，可説是～了」（貯水池が有れば，雨天には水を貯められるし，干天には灌漑できるから，備え有れば憂い無しと言える）から，**水害・旱害頻発の国情や節気の名称・観念に見える農業・雨水への重視を再認識できる。**

『現代漢語詞典』で用例が付いていない「居安思危」も警句として好く使われており，中共政権成立の直前の指導者・識者に由る専門委員会の国歌審議で決め手とも成った。抗日歌『義勇軍進行曲（行進曲）』（田漢作詞，聶耳作曲，1935）を推す主張に対して，「中華民族到了最危険的時候」（中華民族は最大の危機に到った）という件に難色を示し，作者も含めて時代遅れの感が有る歌詞の修正を求める意見も多く出た。周恩来は「居安思危」を引いて将来も戦争に直面しかねないとして採択を擁護し，毛沢東の裁定と全員の納得に由って原状の儘で「代（暫定）国歌」に決った[15]。この日（9. 25）の9ヵ月後（50. 6. 25）に勃発した朝鮮戦争に中国は出兵した（10. 25）ので，**戦乱が絶えない民族の多難**を熟知した初代総理兼党中央軍委副主席の先見の明は立証された。毛が指名した後継者華国鋒の主導で78年3月5日に新しい国歌（無題）が全人代で採択され，同じ曲の勇ましい旋律に毛沢東・共産党礼賛と全民団結を謳う歌詞が付けられたが，翌年2月17日に中国は越南に対する「辺界（国境）自衛反撃戦」を起し戦火が再燃した。82年12月4日に全人代で「文革」色の濃い国歌を廃し『義勇軍進行曲』を正式の国歌にしたが，当初この歌を薦めた向きが同類の前例として援引した仏蘭西の国歌も義勇兵が広げたのである。1792年に墺太利との戦に臨む際リール工兵大尉が士気鼓舞の為に詞・曲を作った『ライン軍軍歌』は，共和国の標語「自由・平等・博愛」の祖形誕生と同時期の95年に国民公会で国歌に制定され，第1帝政・王制復古（1804～30）下の禁止を経て第3共和制（70～1940）下で再び国歌に採用された。通称『ラ・マルセイエーズ』は馬耳賽からの義勇軍が巴里までの行進中歌い続けた事に由るが，『馬賽曲』（中国語名）の「義・勇」を呼び掛ける強烈さは『義勇軍進行曲』の比ではない。例え

ば７段落中の１段落目を結ぶ「進め，進め，我等の土地に穢(けが)れた血を降らせよう[16]」は，中華人民共和国国歌（１段落のみ）の「冒着敵人的砲火前進！ 前進！ 前進！ 進！」（敵の砲火を衝いて進め！ 進め！ 進め！ 進め！）よりも凄味が有る。

後者の冒頭の「起来！ 不願做奴隷的人們！」（起て，奴隷に成りたくない人々よ）は，前者の最初の「起て，祖国の子等(ら)よ！」を彷彿とさせる。仏蘭西国歌は次に「栄光の日は来たれり。我等に向けて血塗(ちまみ)れの旗を専制者は掲げたり」と来るが，侵攻された中で祖国防衛の為に奮起する敵愾心は『義勇軍進行曲』の由来でもある。「義勇軍」は『日本国語大辞典』では「《名》戦争，事変に際し，国家の強制によらないで，人民が進んで編制した戦闘部隊。義勇兵団。義勇隊」と説明され，２点の和文用例（初出＝「蛻巖先生答問書［1751―64か］中」）が示す様に和製漢語である。【義勇】の「《名》1正義と勇気。2正義に基づいて発する勇気。3進んで国や主君のため，力を尽くすこと。また，その軍勢」の中で，前の両義には「漢書-陳湯伝」「李陵-答蘇武書」の典拠が有り3は和製語義である。漢籍の後者の「功略蓋二天地一，義勇冠二三軍一」と3の語釈中の「軍」とが結合した「義勇軍」は，『現代漢語詞典』の解説では「㊀人民為了抗擊侵略者自願組織起来的軍隊。特指我国抗日戦争時期人民自動組織起来的一種抗日武装」（《名》人民が侵略者を抗撃する為に自発的に組織した軍隊。特に我が国の抗日戦争の時に人民が自発的に組織した１種の抗日戦闘部隊を指す）と為っている。【党[1]】の❶「㊀政党，在我国特指中国共産党」（《名》政党，我が国では特に中国共産党を指す）から，他の「民主党派」は翼賛団体に過ぎないという１党独裁の実態が窺えるのと同様に，【義勇軍】の「特指」には抗日戦争の記憶を国歌と共に半永久的に残して行く意思が読み取れる。中日友好条約締結（1978. 8. 12）の年に修正された国歌の４年後の「先祖帰り」は，**対外戦争が略(ほぼ)起り得ない時代に於ける「居安思危」意識の健在**の現れと受け止めても可(よ)かろう。

仏蘭西のアルベールビルで開催された1992年冬季五輪（2. 8～23）の開会式の初めに，１人の少女が平和の象徴と為る１羽の鳩を空中に放ち戦争の遺物である国歌を声高(こわだか)に熱唱した。「聞け，戦場の残忍な敵兵の咆哮(ほうこう)を。奴等は我等の腕(かいな)の中にまで，汝等(なんじら)の妻子の喉掻(か)き切らんと襲い来る！」という歌詞は，創作の200年後の同国の長閑(のどか)な雰囲気の中で幼気(いたいけ)な少女に歌わせるには違和感が免れない。然し2015年11月13日に「イスラム(I S)国」の暴徒が巴里で仕掛けた同時多発恐怖(テロ)襲撃に由って，修正論が幾度も出た歌詞の今日性は図らずも130人殺害・352人負傷の事実で認識された。オランド大統領の戦争状態宣言は**冷戦終結26年後も猶(なお)武力抗争の激化が已(や)まない**事を物語っており，日付が緊急通報用電話番号に暗合した00年の米国「9. 11」同時多発恐怖(テロ)襲撃も，仏ボジョレー葡萄酒(ワイン)解禁（11月の第３木曜日）直前の13日（金曜日）の華の都の惨劇も，汚い底意地を感じさせる程の不吉な「黒白鳥(ブラック・スワン)事変」を非情に突き付けた物である。14年３月１日に雲南省省都昆明の駅で起きた５人の黒服の覆面暴徒に由る無差別斬殺事件は，正に女・子供の喉を掻き切るまでの凶行で31人死亡・141人負傷の犠牲を出した。３日、５日の中国人民政治協商会議（中共主導の超党派政治助言機関）、全人代の年会開幕式で，代表全員が異例の起立・黙祷で哀悼の意を表したが，先立って吹奏された『義勇軍進行曲』は**米国を除く他の国歌に類が無い「危険」**を実感させた。巴里恐怖(テロ)の２週間後に廃兵院(アンバリッド)で行われる追悼式で大統領の選曲に由って２回流れた国歌[17]は，未曾有の大惨事を起したイスラム過激派組織の壊滅に全力を尽す決意の強調表現とも為る。全国政協会議で昆明駅事変へ弔意が捧げられた日に「周永康問題」の報道が解禁され，

「政法王」の異名を持つ前政治局常務委員（党内序列９位）は軈て党紀・国法で厳罰された。軍の制服組の頂点に立った前軍委副主席徐才厚・郭伯雄も同年と翌年に党籍剥奪・身柄拘束をされたが，軍のこの上無い堕落を天下に曝すまでの**習近平体制の「反貪腐」（汚職・腐敗撲滅）は，「亡党・亡国・亡軍」（党・国・軍の滅亡）の危機に駆られた「陰中陽」の行動**に他ならない。

中・米国歌の「危険」共有と中・日文化の「である・成る」型対「する・為す」型

映画『風雲児女』の主題歌であるこの曲が雑誌に発表された翌月（1935. 6），後に経済学者・中国民主建国会主席・全人代副委員長と成る成思危が北京で生れた。父親（多くの新聞社の社主を歴任した成捨我）が「居安思危」から取った名前には，戦雲が漂う中で男児が国家の安危に関る責任を忘れないようという願望が込めてある[18]。2年後に北京近郊の盧溝橋事変（7. 7）で暫しの安康が重大な危機に由って破られ，『義勇軍進行曲』の歌詞の通り「毎個人被迫着発出最後的吼声。起来！ 起来！ 起来！」（人々は追い詰められて最後の雄叫びを上げる。起て！ 起て！ 起て！）という局面に突入した。上海四行倉庫防戦（10. 26～11. 1）の抗日英雄を讃える『八百壮士歌』（桂涛声作詞，夏之秋作曲，38）では，瀬戸際の怒号として「中国不会亡」（中国は亡び得ない）が冒頭から繰り返されている。その中の「我們的国旗在重囲中飄蕩」（我等の国旗は重囲の中で翻っている）は，米国の国歌の「我等が死守する砦の上に星条旗は雄々しく翻っていた」と２重写しに成る。後者の前の「黄昏の最後の輝きを浴びて，誇り高く掲げられた我等の旗，危険極まり無い戦闘の最中にも[19]」の中で，下線部分（原文＝last，perilous）は『義勇軍進行曲』の「最後的」「最危険的」と重なる。『星条旗』の誕生は米英戦争（1812. 6. 18～15. 2. 18）中の14年９月13日の事で，英艦隊の猛烈な砲撃を浴びても落ちない要塞と星条旗の壮観に感動したキー弁護士が詩を作った。皮肉にも曲は宗主国であった英国の社交倶楽部の公式歌『天国のアナクレオンへ』であり，『マクヘンリー要塞の防衛』の詞を配した組み合せは「陰陽魚」の感も無くはない。英国の国歌『女王陛下万歳』の曲を踏襲した前の国歌に代った1931年３月３日は，29年秋の米国で始まった世界大恐慌のどん底（32年後半～33年春）の直前に当るので，**祖国賛美が主眼と為る前者から祖国防衛を称える後者への転換は時代精神を感じさせる**。中国軍が死守した四行倉庫の屋根に日本軍の掃射に関らず国旗がはためき続けた光景は，『星条旗』の産婆とも言える「危険極まり無い戦闘（fight）」の壮絶な場面と一致するが，**倶に国歌に「危険」を盛り込んだ米・中はこうした伝統の為に熾烈な対抗が起り得よう**。

米国が同じ言語・文化圏の宗主国・敵手の曲を２度も国歌に用いたという皮肉な事と通じて，中国では日本語から逆輸入した「義勇軍」は特に抗日部隊を指し国歌の題にも使われた。抗日戦争勝利後に『八百壮士歌』の通称『中国不会亡』は『中国一定強』に変えられたが，「一定強」（必ず強く成る）という決意は昨今の**「強盛大国」化**に由って現実と成った。『星条旗』誕生の200年後の2014年は中国の「全面深化改革元年」「反貪腐元年」であり，国歌制定の65年後に当る同年３月３日の周永康醜聞の表面化は政争昇級の信号と言えるが，２年前の『2014年，中国は崩壊する』（宇田川敬介著，扶桑社）の観測は見事に外れた。15年の最初の５ヵ月半には中国本土の株式市場は同時期の世界で最も活況を呈しており，上海株（上海証券取引所）の時価総額

は4月17日に初めて日本株（日本株式取引グループ）を上回って[20]，紐育（ニューヨーク）証券取引所・ナスダック市場（米）に次ぐ3位と成り，深圳（せん）株も立て続け倫敦（ロンドン）・香港を抜いて5位に躍進し[21]中国の実力膨脹を印象付けた。5月の日本株式市場は27年振（ぶ）りに11日連続で日経平均が上昇し，上げ幅が同月の21年来の大きさ（1 043円）と成り，東証1部上場銘柄の時価総額（政府保有株を除く基準（ベース）で599兆円）が25年振りに最高を更新する等，株価が下げ易いとされる経験則とは裏腹の記録尽（ずくめ）の快進撃を見せた[22]が，その絶好調を上回る怪気炎で1～4月の上海株の売買代金は世界1に成り4月単月は紐育市場の2.1倍にまで膨らんだ[23]。日本抜きの快挙達成の日の上海証券総合指数の終値（おわね）4 287点（ポイント）は1年前の同2 098の2.04倍に当るが，持続的な騰貴を押し上げた投機的な熱気は07年春～秋の「牛市（ブル・マーケット）」（強気・上昇相場）の再来で，前回風靡した『義勇軍進行曲』の替え歌『炒股進行曲』（株投資行進曲）が又聞えて来た。「起来！ 不願再貧窮的人們！ 把我們的money，投入我們洶湧的股海。中国股市到了最癲狂的時候，毎個人都亢奮着発出“満倉”的吼声。起来！ 起来！ 起来！ 我們万衆一心，冒着瓘燦的泡沫前進！ 冒着瓘燦的泡沫前進！ 前進！ 前進！ 進！」（起て，再び貧困に成りたくない人々よ！ 我等の金（マネー）を我等の株の大海（おおうみ）の怒涛に投入せよ。中国の株式市場は狂気の極みに到った。全員が激昂して「目一杯買う」と雄叫びを上げる。起て！ 起て！ 起て！ 我等万人心（ばんにん）を1つにし，絢爛たる泡沫（バブル）を発して進め！ 絢爛たる泡沫（バブル）を発して進め！ 進め！ 進め！ 進め！[24]）原文の「把我們的血肉築成我們新的長城」（我等の血と肉で我等の新しい長城を築こう）を捩（もじ）った3句目の様に，下線で示した国歌に対する改纂は如何にも不謹慎で不敵（ふてぶて）不敵（ふてぶて）しくて巫山戯（ふざけ）た感じがするが，**自信満々の「満倉」を敢行し「衝天牛気」（天を衝く強気）を盛り上げた「狂牛」群は，軈（やが）て天井に着いた後の反落で「洶湧」の字形に含まれる「勇→凶」の逆転に遭った。**

『新明解国語辞典』に無いこの漢単語は『広辞苑』の「きょうゆう【洶涌・洶湧】」の項で，「水の勢いよくわき出るさま。波のたちさわぐさま。きょうよう」と説明されている。親項目と同義の別項を立てた異読（漢音）に近い由来の中国語（xiōngyǒng）は，『現代漢語詞典』の【汹涌】の語釈では「動（水）猛烈地向上涌或向前翻滚」（《動》［水］猛烈に上へ涌く，又は前へ逆巻く）と為り，用例の「～澎湃｜波涛～」（「水が涌き上がり波がぶつかり合う。怒涛の勢いが有る譬え」「波涛が逆巻く」）も付いている。「澎湃（ほうはい）」は『新明解国語辞典』にも例文付きで収録されており，「〔水がみなぎって波うつ意〕広い範囲にわたって起こり，止めることが出来ない様子だ。“平和を求める声―として起こる”」と言う。『広辞苑』の【澎湃・彭湃】は語釈の「水のみなぎりさかまくさま。転じて，物事が盛んな勢いで起こるさま」の次に，「“世論―として起こる”“―たる変革の気運”」と例文を2つ付けている。『現代漢語詞典』の【澎湃】は「形❶形容波浪互相撞擊。❷形容声勢浩大，気勢雄偉」（《形》❶波がぶつかり合う様の形容。❷威勢が盛んな様，気勢が雄大な様の形容）の両義で，其々「波涛汹涌～」「激情～的詩篇」（激情が澎湃たる詩篇）の例示が有る。『日本国語大辞典』の【洶涌・洶湧】は「《名》（形動タリ）（“ゆう”は“涌”“湧”の慣用音）波がさかまくこと。水が勢いよくわき出ること。また，そのさま。勢いのよいさまのたとえにも用いる。きょうよう」とし，漢籍出典の「司馬相如-上林賦“沸乎暴怒，洶湧彭湃”」を挙げている。【澎湃・彭湃・滂湃】の解釈は「《形動タリ》水のみなぎりさかまくさま。水や波が音をたててはげしくぶつかりあうさま。転じて，物事が盛んな勢いでもりあがるさま。強く起こりひろがるさま」で，漢籍として上記の1点（但し後半の「洶涌滂湃」は2字が

異なる）と「稽康-琴賦“奮沫揚濤，瀰汨澎湃。〈注〉銑曰，瀰汨澎湃水声也”」が掲げてある（『広辞苑』に無い「滂湃」は『現代漢語詞典』では立項され，説明は「形水勢浩大」［《形》水勢が壮大である］と具象的な意味のみである。中国語では「滂」［pāng］は「澎・彭」［péng］と発音も声調も違うので，抑々【澎湃・彭湃・滂湃】の3語同一視は中国語の見地からすれば奇異な印象を受ける。『日本国語大辞典』の当該項目の和文用例4点中の3点で「澎湃」に作り，2番目の「米欧回覧実記（1877）〈久米邦武〉一・一五」では「泙湃」と為るので，漢・和両方の典拠が無い「滂湃」の見出し中の併記は益々理解し難い）。「洶涌・洶湧」「澎湃・彭湃」の語源に有る「洶涌（洶湧）澎湃」（『漢語大詞典』の表記）は日本語では4字熟語に成らなかったが，日本で使用頻度の低い単語の方が名詞（形容動詞）と為り中国語で動詞と為る事は，**両国の言語・文化の「である・成る」型と「する・為す」型の発想の違い**を思わせる。

毛沢東等が建国後に推進した漢字改革の結果「洶湧」は簡体字の「汹涌」に変り，「澎湃・彭湃」は逆に画数の多い前者の方で一本化したが，其々「氵（水）」「凶」が突出する形は**水利への渇望と水害への畏怖**を映し出す。「氵（水）」と共に「洶・湧」を構成する「匈・勇」は字面で匈奴の蛮勇を連想させるが，前3～後5世紀に亘って漢族を脅かした彼の民族の名の2字は**恐懼と軽蔑の組み合せ**である。『日本国語大辞典』の【匈奴】の「《名》1中国古代，北方の遊牧民族。（下略）」には，「史記-匈奴伝“匈奴其先祖，夏后氏之苗裔也”」が引かれており，『現代漢語詞典』の同項目の語釈も「我国古代民族」（我が国の古代の民族）で始まるが，同じ属性と為る北方の遊牧民族「鮮卑」と同様に劣等・卑賤の形象が付いており，『日本国語大辞典』の2も「転じて，陸奥国の仙台藩主（仙台候）のあだ名。奥羽地方は古くから未開で野蛮な地とされてきたので，その地の雄藩である仙台藩主になぞえられていったもの」である。奴隷に成りたくない人々の怒号を上げる『義勇軍進行曲』が国歌と為る中共政権の下でも，新華社（国営通信社）の専門家集団が決める外国の国名・人名等の定訳には微妙な差別が見られる。例えばMozambiqueの旧訳「莫三鼻給」は「莫家の三郎が劓（鼻切り）の刑を受けた」という変な連想をさせ，Kenyaの旧訳「怯尼亜」も鮮卑の「卑」と重なる「卑怯」の「怯」を使った。前者は葡萄牙から独立する（1975. 6. 25）直前から「莫桑比克」に改称され[25]，後者も同じく周恩来の指摘と発案で文字通り肯定的な「肯尼亜」に直された[26]。曾て朝鮮戦争中の第2代国連軍最高司令官Ridgwayは一旦「李奇威」と訳された後，敵の統帥を矮小化させる意図から「威」は同音・同声調の「微」に変えられたが，この類の貶す意の字を避ける原則の確立後[27]も同じ南半球の反対側に気懸りの訳名が残っている。

その1例はGuatemalaに対応する「危地馬拉」の「危」（「微」と同音・同声調）で，Boliviaに当てる「玻利維亜」やViennaに当てる「維也納」の「維」も，Venezuelaの訳語「委内瑞拉」の「委」も同音ながら使われていない。Ecuadorの「厄瓜多爾」の「厄」は同音・同声調の「悪」と比べれば最悪ではないが，Russiaの「俄羅斯」の「俄」にでもすれば「厄運の瓜が多い乎」と取れる表記に成らずに済む。日本で死語化した中国語の「瓜果」（果物の総称。『日本国語大辞典』1の語釈＝「果実の総称。ウリと木の実とその他の果実を併せていったもの」）から，「厄瓜」（存在しない単語）は「悪果」（悪い結果）の対として捉えられかねないから，面積が世界第26位と為る同国への配慮は阿弗利加の小国の場合よりも足りない（尤も，南米を表す中国語の「南美」は阿弗利加の中国語訳「非洲」より美しく，「非」は「菲律賓」［＝日本語の「比律賓」］の

同音・同声調の「菲」と比べるまでもなく否定的な意である）。台湾では「莫三鼻給」が「莫三比克」に変ったのは本土より5～6年遅かったが[28]，Hondurasの訳「宏都拉斯」は本土・香港の「洪都拉斯」より恰好が好い。柬埔寨首相フン・センは2003年に中国語名「洪森」を「雲昇」を変えたが，華人の友人や占い師の助言に由るこの挙動[29]も「**洪**」**の選好度の低さ**を物語っている。『広辞苑』の「ハンガリー【Hungary・洪牙利・匈牙利】」の併記は，「匈牙利」が唯一の訳で「洪」と「匈」の発音が違う中国語の感覚では訝れる。『日本国語大辞典』の同項目に用例が無い為「洪牙利」「匈牙利」倶に出処不明であるが，音読みが違う「洪・匈」の奇妙な同居は両者の部首と字が合成した「洶」にも接点が有る。**漢字文化の魔法を成す漢字の形・音・意の機微と結合・転変・派生の可能性**に由って，其処から**中国で根強い強者への畏敬や凶暴への危惧の集団心理**を掴む手掛りが得られる。

中国の「厲・害」の強烈さと両国の戦・乱の多寡，両言語の動静・剛柔の相違

『全訳　漢辞海』（戸川芳郎監修，佐藤進・濱口富士雄編，三省堂，2011）の【匈】の項では，語義は「一《名》❶むね。通胸。“匈中（＝胸のうち）”❷▶【匈奴】」，なりたちは「説文《形声》むね〔底本は“聲”とするが“膺（＝むね）”〕の誤り。“勹”から構成され，“凶”が音。“胷”は異体字で，肉から構成される」と言う。【匈奴】の説明は「前三世紀末から蒙古地方に拠より，勢力をふるった遊牧騎馬民族。人種については定説はなく，単于とよばれる首長をいただく諸部族の連合である。戦国時代から秦漢代を通して中国を脅かし，征討と和親とを繰り返した。一世紀中ごろに南北に分裂し，南匈奴は漢民族に同化した。北匈奴は後漢に討たれて西走し，二世紀中ごろにその消息を絶った。四―五世紀にヨーロッパを荒らしたフン族は，北匈奴の子孫であるといわれる」と為るが，**征討と和親，連帯と分裂，同化と転進等の対立・統合は中国の歴史とも重なる**。漢族への帰化を拒んだ北匈奴の後裔と見られる種族は『広辞苑』の「フン【Hun・匈】」で，「モンゴル・トルコ系の騎馬遊牧民族。四世紀後半にヨーロッパに侵入し東・西ゴート族を圧迫，民族大移動の原因をつくった。人種的には匈奴と同族ともいう。フン族」と紹介されている。【Hun・匈】と【Hungary・洪牙利・匈牙利】，HunとHun Senの「洪森」との一部の吻合は，国歌『匈牙利人神のに恵みを』（1903年採用）の先祖讃頌に見る匈牙利人の帰属意識とも合致する。今も主体民族を為す亜細亜系のマジャール人が建設したこの国では，匈奴の同族乃至その子孫と見る向きが国際的にも多い匈族の血統に対する主張が強い。「匈奴」「匈族」（『日本国語大辞典』の【フン族】に無い表記）を持ち合せた「匈」は，日本語で訓読みが「騎馬」と同音の「牙」や「鋭利」の「利」との組み合せで名訳を成している。「牙」は日本語の「西班牙」「葡萄牙」と同じ「西班牙」「葡萄牙」，Côte d'Ivoireの日本・中国本土の旧訳（同国の要請に由る86年からの国連の改称に従った新訳は「科特迪瓦」）及び台湾・香港の現行訳と同じ「象牙海岸」の他，Jamaicaに当る「牙買加」でも使われている。日本語の「雅典」と同じ「雅典」やSeattle，Jakartaを表す「西雅図」，「雅加達」等の「雅」（第2声の「牙」と違う第3声）に比べて，「匈」に通じる「胸」の部首で象徴される肉食系の騎馬民族らしい牙を剥く感じもするが，同音・同声調の「凶」を含む「匈」と「牙・利」の合成は蛮勇・猛威等の形象を漂わ

せる。

中国語の「凶」は『現代漢語詞典』の語釈の通り，❶「不幸的（形容死亡，災難等現象，跟“吉”相対）」（不幸の［死亡・災難等の現象を形容し，「吉」に対して言う］），❷「指年成很壊」（１年の作柄が大変悪い事を指す），❸「形凶悪」（《形》凶悪な），❹「形厲害」（《形》酷い。甚だしい），❺「指殺害或傷害人的行為」（人を殺害する又は傷害する行為を指す），❻「指行凶作悪的人」（凶行に及ぶ又は悪事を働く人を指す）という多義を持つ。❶❷❻の用例に有る「～事」「～年」「元～」と❸の語釈用語は日本語にも入っており，❺の中の「～犯」（凶悪犯）は元々和製漢語である（『広辞苑』等に無いこの単語は『日本国語大辞典』の【凶犯・兇犯】では，「《名》凶悪な犯罪人。また，その犯罪」と説明され，「玉石志林（1861―64）一」の用例が挙げられた）が，❹の意味と語釈の単語は**日本語に無いだけに中国的な発想や用法を吟味する必要が有る**。『現代漢語詞典』の【厲害】は「形❶難以対付或忍受；劇烈；凶猛。❷厳厲」（《形》❶対応又は忍耐し難い。劇烈な。凶暴で力強い。❷厳粛で厳しい）の両義で，「也作利害」（「利害」にも作る）と付記されている。❶の用例は「心跳得～｜天熱得～｜這着棋十分～」（「心臓が激しく鼓動する」「酷く暑い」「これは非常に厳しい強手だ」）の中で，囲碁・将棋・国際将棋等の着手を形容する最後の方は「酷い」意を持っていない。❷の用例「這個老師很～，学生都怕他」（この先生はとても厳格で，学生は皆彼を恐れている）も，「凶」の他の語義の悪・負の印象とは逆に寧ろ畏敬に値する意味合いが有る。【厉（厲）】（語釈＝「❶厳格。❷厳粛；猛烈」に「害」を付けても肯定的な意味に成り得るのは，「酷」の中国語の両義と同じく**全体的な否定に部分的な肯定を含む「陰中陽」**の現れである。「凶」「厲害」の和訳に出るこの字は『現代漢語詞典』の【酷[1]】では，日本語と共通する❶「残酷」と❷「程度深的」（程度が深い）の両義と為り，其々の用例の中の「～刑」と「～熱｜～寒｜～似」も日本語と共有する（４単語中「酷寒」は和製漢語。『日本国語大辞典』の項に漢籍出典が無い【酷熱】は『漢語大詞典』では『三国演義』第88回の用例が有る）が，同音・同声調（kù）の【酷[2]】は「形形容人外表英俊瀟洒，表情冷峻堅毅，有個性」（《形》人の外見が男前・瀟洒で，表情が冷厳・剛毅で，個性が有る様に譬える）の意である。語釈の後の「［英 cool］」が示す様に外来語の当て字として生れた新語であるが，字面の「冷・酷」は称賛の語義に対して**提灯の火や光を包む紙の様な陰・陽の間の皮膜**に映る。

『現代漢語詞典』の親字【厉［厲］】（簡体・繁体併記，本稿では便宜上日本語の漢字を使う）の項内の６単語の中で，【厲色】（「名厳厲的面色；憤怒的表情：正言～」［《名》厳粛で厳しい顔色。憤怒の表情。“冷厳な面持で厳正に言う”］）・【厲声】（「副［説話］声音厳厲地：～斥責」［《副》〈話す時〉厳しい口調で。「厳しい口調で叱咤する」］）・【厲行】（「動厳格実行：～節約」［《動》厳格に実行する。「節約を厲行する」］）は，『広辞苑』にも対応の項目が有る（【厲色】＝「はげしい顔色をすること。血相を変えること」，【厲声・励声】＝「声をはりあげること。大喝すること。“―疾呼”」，【励行・厲行】＝「はげみおこなうこと。一所懸命つとめること。“乾布摩擦を―する”“貯蓄の―”」）。【厲鬼】（「名悪鬼；鬼怪」［《名》悪鬼；幽霊・妖怪］）は，『広辞苑』の【癘鬼】（「流行病などを起させる悪神。疫病神」）と字形・語義倶に違いが有る。『日本国語大辞典』の【癘鬼・厲鬼】（語釈は同前，但し「疫」は「厄」に作る）では，「春秋左伝-昭公七年」の出典でも和文用例の４点中の１，２，４番目でも「厲鬼」と為るが，「癘」（『現代漢語詞典』の語釈＝「〈書〉❶瘟疫。❷毒瘡」［〈文［章語］〉❶疫病。❷壊疽に成った傷。悪性の膿瘍］）が規

範に成ったので，「江戸繁昌記（1832―36）五・千住」にも出た「厲鬼」の蒸発は「**厲**」**への敬遠**の様に思える。他の【厲兵秣馬】（只参照を指示する主項目【秣馬厲兵】の語釈は，「喂飽馬，磨快兵器，指準備作戦〈“厲”古同“礪”〉。也説厲兵秣馬」［軍馬に飼葉を充分遣り，武器を磨ぎ澄ます。戦争を準備する事を指す〈「厲」は古代で「礪」に同じ〉。「厲兵秣馬」とも言う］）は，『左氏春秋伝・僖公三十三年』の「厲兵秣馬」が初出の由緒有る成語であるが，その魯僖公33年（前627）の2 600年後に出た『日本国語大辞典』（初版＝日本大辞典刊行会編，全20巻，1972～76）には，何れの組み合せばかり抑々「厲兵」も「秣馬」も無い。『日本国語大辞典』の「まつ《字音語素》末・抹・沫・秣・靺」の中の【秣】は，「㊐牛馬の飼料。かいば。まぐさ。／芻秣，料秣，糧秣／粟秣／秣穀／」（㊐＝慣用音）のみである。「厲兵秣馬」と「厲害」の有無は**両国に於ける戦・乱の多寡**を反映している様に思えるが，上記単語中の日本語の「厲・励」の併記乃至「励行・厲行」の順位も気に掛って来る。

『現代漢語詞典』の【励（勵）】は姓の1つを表す❸（【厲】の項に同じ）の前に，❶「勧勉」（励ます）と❷「〈書〉振奮；振作」（〈文［章語］〉振い起つ。奮起する）の意が出る。❶の用例「勉～｜鼓～｜奨～」は全て日本語に入ったが，「勉励」は『日本国語大辞典』にしか収録されておらず（語釈＝「《名》［形動］つとめはげしむこと。一心に努力すること。また，そのさま」。和文用例4点中の2点目「蘭東事始［1815］下」では，「漢書-循吏伝序」の出典と同じ「勉厲」を使う），語釈の「勧勉」も同様である（＝「《名》学問や事業などを勧めてつとめさせること」，漢籍出典は「礼記-表記」より）。❷の用例「～精図治」は【励】の子見出し（2項）に於いて，「振作精神，想辦法把国家治理好」（精神を振い起して，方法を考えて国家を好く統治する）と説明されている。『日本国語大辞典』の【励精・厲精】は「《名》精神を奮い起して努めること。精励」の意で，漢籍出典「漢書-循吏伝序“始躬二万機一，厲レ精為レ治”」に対して和文用例は全て「励精」と為る。『漢語大詞典』の【厲精図治】の出典「《宋史・神宗紀賛》：“厲精図治，将大有為。”」は，同辞書で立項されていない「励精図治」の由来を示していないが，『現代漢語詞典』の【励精図治】は今の中国で並立しない「厲精図治」より合理的である。一方，『日本国語大辞典』の【励行・厲行】の語釈は『広辞苑』と『現代漢語詞典』の合成の様に，「《名》はげみおこなうこと。一所懸命つとめること。また，きびしくおこなうこと。厳格に実行すること」と為る。漢籍出典の「後漢書-朱暉伝“有レ所二抜用一，皆厲行之士”」の表記と違って，和文用例（3点）の初出「拙堂文集（1853頃か）三・下岐蘇川記」では「苦学励行之人」と書いた。次の「福翁自伝（1899）〈福沢諭吉〉欧羅巴各国に行く“仏蘭西では徴兵令を厲行（レイカウ）して居るが”」「電車の混雑に就て（1922）〈寺田寅彦〉“定員の励行を強行する事も必要であるが”」は，中国語と同じ表記・品詞と強要の意味である前者よりも，和製表記の上に同項目の属性規定と為る名詞で推奨の要素の強い後者の方が順位を上げた。語釈中の「つとめる」「きびしく」を対応の漢字「努」「厳」と見比べれば，字形が示唆する様に**匈奴的な強力・勇敢の濃淡や両言語の動と静，剛と柔の相違**を感じる。

政治色が薄い日本語の軟質性と包容力・多様性・重層性に富む日本の「雑種文化」

『日本国語大辞典』の【励精・厲精】の用例中「励精図治」と同じ国事に関るのは，２点目の「百官群臣に国是を諮詢し給へる詔―明治二年（1869）四月二〇日“朕将に励精竭レ力，大いに経始する所あらんとす”」だけである。『広辞苑』の【励精・厲精】の「はげみつとめること。精を出してはげむこと。精励」も，【精励】の「つとめはげむこと。力を尽くしてつとめること」と【精励恪勤】「力を尽くして，自分の職務に励むこと」も，**政治色の薄い日本語らしく天下国家の為に尽力する意味が乏しい**。『日本国語大辞典』の【精励】は「後漢書-朱浮伝“学者精励，遠近同慕”」を引いているが，『漢語大詞典』にも無いこの単語で構成した「精励恪勤」は『日本国語大辞典』に拠れば，「なめくぢ横町（1949）〈尾崎一雄〉三」が初出と為る和製熟語である。同義の「恪勤」と部分同義の「恪勤」を異読の別項にした「かっ―ごん【恪勤】《名》」では，「1任務に忠実なこと。怠ることなく勤めること。精勤。かくご」の和文用例（４点）の後に，漢籍出典として「国語-周語上“朝夕恪勤，守以二惇篤一”」が挙げられたが，勤勉を中華民族の美徳の筆頭とする現代中国では何故か『漢語大詞典』にも入っていない。対照的に「恪守」は『広辞苑』では語釈の「つつしんで守ること」だけであるが，『現代漢語詞典』では「〈書〉動厳格遵守」（〈文〉《動》厳格に遵守する）の説明の他，「～中立 | ～不渝」（「中立を厳守する」「終始一貫厳守する」）という用例も付いている。『日本国語大辞典』の同項目（語釈は『広辞苑』と一致）では，漢籍出典の「福恵全書-刑名・賊盗下・土番“宜下恪二守吾言一以無上負”」の前に，和文用例の「戊申詔書-明治四一年（1908）一〇月一三日“寔に克く恪守し，淬礪（さいれい）の誠を輸（いた）さば，国運発展の本近く斯（ここ）に在り”」と有る。他に用例が無い事は「恪守」の様な**政治関連の言葉が発達し難い日本語の特徴**に符合するが，皇室用語らしい硬質の言辞は100年後に現行版が出た『広辞苑』では幾つか消えている。

詔書の原文の「寔ニ克ク恪守シ，淬礪ノ誠ヲ輸サバ，国運発展ノ本近ク斯ニ在リ」は，**片仮名→平仮名の軟質化処理**が施された上で「淬礪」「輸」「斯」に読み仮名が添えられた。古代漢語で「厲」と通じた「礪」の難読字扱いは中国語に於ける「淬」と同じであるが，当世の日本では知識人も含めてこの１文を完全に正しく読める人は恐らく極僅かしか無く，年収１千万円を超す会社員や１億円以上の金融資産を持つ富裕層（其々約199万，245万人[30]）よりも，人口に占める比率では稀少価値が100倍も高いのではなかろうか。何しろ明治の終焉（1912. 7. 30）から98年半経った2011年１月24日の衆参両院の本会議で，菅直人首相が就任後初めての施政方針演説の際に手にした原稿の「七　結び」の冒頭の前後の頁には，総数116字の中で「巡視船」「警察権」「国会」「来年度」「早期」「活気」に振り仮名が付いた。当人の姓こそ異読が有る（１例が第２～３次安倍晋三内閣［12. 12. 26～］の官房長官菅義偉）が，此等の単語の読み方は「ゆとり教育」で学力が低下した中学生にも余裕綽々のはずである。取り分け「国会」は演説を行う神聖な場であり冒頭から10回繰り返して来た言葉なので，面倒を厭わず発音が付記されたのは記憶力・集中力を疑われ国会軽視と批判されかねない。『週刊新潮』２月３日号の記事「国会冒頭でバレた菅直人総理の読める漢字と読めない漢字」の写真では，「七　結び」の最初の「本日，国会が開会しました。／この国会では，／（下略）」（筆者が付けた斜線は改行を示す記号，以下書籍・報道等の引用の場合は同じ）の２番目の「国会」は難読扱いではないが，以下「国会」「前国会」「国会」「国会質疑」「国会議員」に言及した数頁が掲載されておらず，同じく不明の前出部分の中の「前国会」「今国会」の読み仮名の有無と共に**整合性**に疑問を感じる。

この2語は「国会」より寧ろ「前」「今」の方が迂闊に訓で読む恐れが有り要注意であるが，関連概念の「湯桶読み」と「重箱読み」の『広辞苑』の語釈には**非対称**が見られる。前者は「“湯桶”のように，漢字二字の熟語の上の字を訓で下の字を音でよむ読み方。手本（てほん）・消印（けしいん）の類。〈書言字考〉⇔重箱読み」と出典付きで説明されたが，後者の「漢字の熟語を“重箱”のように，上の字を音（おん），下の字を訓でよむ読み方。⇔湯桶（ゆとう）読み」は，用例は1つも無く2字とも限らず参照を指示した反対語には逆の場合に無い振り仮名が付く。『新明解国語辞典』初版の「じゅうばこ⓪（ヂュウ）【重箱】」の内の［―読（み）⓪］の解釈は，「上は音，下は訓の語で構成される，漢字二字の熟語。例，重箱・団子。↔湯桶（ゆとう）読み」であり，「ゆとう⓪（オ）【湯〈桶】」（〈は当用漢字表外の字の記号）の内の［―読（み）⓪］の定義・例示は，「上は訓，下は音の語で構成される，漢字二字の熟語。例，見本・切符。↔重箱読み」と為っている。2項目間の形式上の非対称の点として前者で見出し語の一部が挙例に使われた事が有り，参照指示の処で「湯桶」に読み仮名が振られ「重箱」には無い事も目に付く。前者は第3版（金田一京助・見坊豪紀・金田一春彦・柴田武・山田忠雄［主幹］編，1981）で「上は字音語，下は狭義の和語で構成される，漢字二字の熟語。例，重箱・団子（ダンゴ）。↔湯桶（ユトウ）読み」に成り，後者は概念の相応の調整の他に第4版（金田一京助・柴田武・山田明雄・山田忠雄［主幹］編，91）から例が「湯桶・見本・切符」に変った。「重箱」に対応する「湯桶」の追加に由って例が2語対3語という新たな**不均衡**（アン・バランス）が生じ，「団子」に読み仮名を添え「見本」「切符」を従来通りにしたのも片手落ちの感じがする。累積発行部数が日本1の6千万超を記録した少女漫画『花より男子（だんご）』（神尾葉子，全37巻，［集英社］マーガレットコミックス，92～2004，08）でも分る様に，「花より～」という日本の諺を構成する「団子」は「だんし」と読まれる事が先ず無い。上記の「湯桶（ゆとう）読み」に対して「重箱読み」の表記は発音が自明である様な印象を与え，故に湯桶読みの「見本・切符」よりこの重箱読みの例に振り仮名を付けた事は不思議である。食べ物の「団子」は『日本国語大辞典』の同項目の語誌の4説中の1番目として，中国の北宋末の汴京（べんけい）の風俗を写した『東京（とうけい）夢華録』に見えるこの語が日本に伝えられる可能性が有るとしたが，同辞書の【重箱読】にも「“団子”を“だんご”，“王子”を“おうじ”と読む類」と出ている。

【湯桶読】の語釈も【重箱読】と同じ様に，「また，広く，一語の漢字熟語を音訓まぜて読むことにもいう」と有る。用例（5点）の一番目の「書言字考節用集（1717）九“湯桶読　ユタウヨミ”」は語誌⑴に拠ると，初出とされるそれに先行して「文明本節用集」（室町中）には「湯桶文章」，「かた言―五」（1650）には「湯桶言葉」といった表現が見られる。猶（なお）「⑵元来は音訓の順番を問わず混読語の総称として用いられていた。明治時代でも大槻文彦の『言海』（一八八九）では“重箱読み”との区別がされていないが，山田美紗の『日本大辞書』（一八九二～九三）では区別している。使い分けが定着したのは，第二次世界大戦後か」と言うが，【重箱読】の語誌⑴が言うには「“湯桶読み”の語が江戸中期以降に頻出するのに対し，“重箱読み”は挙例の『東牖子』の例が近代以前の孤例とされる」。用例（2点）の初出「随筆-東牖子（1803）四“今船場の重箱読（ジウバコよみ）当らず”」の次は，「漢字要覧（1908）〈文部省〉三“正則に非ずして，音訓交へ読むことあり，音と訓と合せたるを重箱（ヂュウバコ）読，又は合羽読と云ふ，団子（だんご），出立（しゅったつ）の類是なり”」である。「合羽（かっぱ）読み」と同じこの変則的な音訓混読の例にも「団子」が挙げられたので，『日本国語大辞典』『新明解国語辞典』の語釈に見え

る定番化は文部省の典範を踏襲している。【湯桶読】の例示は「“手本”を“てほん”，“身分”を“みぶん”，“野宿”を“のじゅく”と読む類」と為るが，3辞書の2類型の挙例中の「手本・見本」の「本」と「身分」の「本」とが「本分」を成し，「野宿」の「野」と「分」とが「野分」を成し，「切符」の「切」と「手本」の「手」とが「切手」を成し，「団子」と「子」を共有する「王子」の「王」と「手」とが「王手」を成し，又其々「正則」の音読み，訓読みと「非正則」の音訓混読の部類に入る。是くして**日本語は2重，3重，5重に積み重ねられる様にした重箱の包容力・多様性を持ち，漆塗りを施すことが多い重箱・湯桶の様に重層性と人工性・精緻さに富んでいる。**

日本は米国並みの多民族の坩堝の感が強い中国と対照的に限り無く単一民族国家に近いが，国語は和語と中国（古代～近代）・西洋（近代以降）中心の外来語から成り，和文は自製表記の平仮名・片仮名と和製「国字」を若干含む漢字を用い，漢字の読み方は呉音・漢音・唐音・宋音・慣用音等が併存し，2字乃至1語の漢単語の和風読みとして「重箱」型・「湯桶」型が有り，更に和製語義乃至和製漢語も数多く派生している。「**拿来（持って来い）主義**」（中国現代文学の旗手魯迅の雑文［『中華日報』1934年6月7日］の題）**に由る吸収・改造の結果，千客万来の雑居集合住宅の様な風貌や伝統を基盤とする「雑種文化」の有り形を呈している**。評論家加藤周一の「日本文化の雑種性」（『思想』［岩波書店］55年6月号）に由来したこの鍵詞は，同論考を収録した『雑種文化：日本の小さな希望』（大日本雄弁会講談社，56）の題の通り，純粋な西洋文化と対比して日本文化を肯定的に位置付けたものである。『日本国語大辞典』の【雑種】の「《名》1二つ以上の種類が入りまじっていること。また，そのもの。2種族の異なった男女，あるいは雌雄の間の交雑によって生まれたもの。狭義には，遺伝子の組み合わせがヘテロ（異型）の構成をもつものをいう」は，前者は和製語義（唯一の用例＝「草枕［1906］〈夏目漱石〉四“余は凡ての菓子のうちで尤も羊羹が好だ。〈略〉ことに青味を帯びた煉上げ方は，玉（ぎょく）と蠟石の雑種の様で，甚だ見て心持ちがいい”」）で，後者は漢籍出典の「後漢書-度尚“尚躬率二部曲一，与同二労逸一，広募二雑種諸蛮夷一，明二設購賞一，進撃大破レ之”」が付く。用例（2点）の初出「生物学語彙（1884）〈岩川友太郎〉“Hybrid 間生，雑種”」は1より早いが，後に出た自家製の方が先に置かれたのは**自国本位の優先順位**の為であろうか。『現代漢語詞典』の同項目の両義は，「名❶雑交而産生的新品種，具有上一代品種的特徴。也叫雑交種。❷罵人的話」（《名》❶交雑に由って出来た新種，親の代の特徴を具有する。交雑種とも言う。❷人を罵る言葉）である。動物・植物の異種間の交雑から来た「碌でなし」の意の侮辱語と為る事はともかく，**文化の命名としての「雑種」は西洋と同じく自国の純正さを尊ぶ中国には当て嵌らない。**

注釈

1）楊鳳城「毛沢東，鄧小平与中国経済長期発展戦略――以“両歩走”和“三歩走”為中心的歴史考察」，『中国井崗山幹部学院学報』2014年4期。

2）鄧小平「吸取歴史経験，防止錯誤傾向」（1987年4月30日），『鄧小平文選』第3巻（人民出版社，1993年）226頁。

3）本稿では当初諸説中の「2010年＝4 504ドル，14年＝7 571ドル」説（「世界経済のネタ帖　2015」サイトの「中国の一人当たりGDPの推移」［SNA〔国民経済計算マニュアルに基づく〕，後出の電脳網情報と同じく15年11月30日最終閲覧］）を取った。同じ名目GDPの近似の数値として「10年＝4 423ドル，

14年＝7 138ﾄﾞﾙ」も有る（木本書店編集部編『世界統計白書［2014年版］』，同年，42～43頁。出典＝International Monetary Fund「World Economic Outbook Database，October 2013」）が，内閣府が2015年12月25日に発表した14年の国民経済計算確報では，１人当り名目国内総生産（GDP）で14年に中国は８千ﾄﾞﾙに達成した（「昨年の１人あたりGDP　日本転落　OECD20位 /70年以来最低，円安響く」，『日本経済新聞』2015年12月25日）。

4）駒田信二「対の思想――あるいは影の部分について」，『新編　対の思想――中国文学と日本文学』（岩波書店，1992年）22頁。

5）鈴木亮（編集委員）「歴史的大相場の入り口？　景気サイクルに乗る投資」，『日本経済新聞』2014年７月23日。「日露戦争、第１次世界大戦を経て，16年あたりまで景気が拡大した」という文中の表現に語弊を感じて，本稿筆者は「第１次世界大戦（14～18）中の16年」と記述した。

6）吉野豊「長期波動で読む日米相場　18年後半までに日経平均３万円も」，『週刊エコノミスト』2015年４月７日，41～43頁。文中の「明治時代の“大勢上昇第１波”」は1890～1919年の時期規定と合致しないので，本稿では「明治～大正」に直した。

7）大竹慎一『あなたが株で勝つための株式投資100の答え』，フォレス出版，2000年，１～３，97～101頁。

8）土居雅紹「春高秋安：過去の値動きを調べてみたら」，「土居雅紹のナルホド投資研究～ｅウラント生みの親が語る投資のコツ～」（plaza.rakuten.co.jp/isewarrant/diary/?PageId=3）2010年10月18日。

9）夏剛「“新興国・老大党”の蹉跌と試練――2011. 7. 23（中共“90歳誕生日”）高速鉄道追突・転落事故の衝撃と啓示」（『立命館国際研究』27巻４号，2015年３月，173～206頁）に詳論が有る。

10）大竹慎一『日経平均4000円時代が来る』，フォレス出版，2005年，44，88，94，109，122，201頁。

11）大竹慎一『ウォール街から日本を見れば　2015世界大恐慌の足音が聴こえる』，徳間書店，2014年，166～167，170頁。

12）Kyoungwha Kim「展望なき中国強気相場　上昇基調に転換　経済には懐疑的な見方も」，『フジビジネスアイ』紙2015年11月６日。

13）望月衛訳『ブラック・スワン――不確実性とリスクの本質』，ダイヤモンド社，2009年，上巻88～90頁。

14）今井宇三郎・堀池信夫・間嶋潤一『易経　下』（明治書院『新釈漢文大系』第63巻，2008年）の訳文（1616頁）を基にし，句読点を一部変えた。

15）中共中央文献研究室編，逄先知・金冲及主編『毛沢東伝（1949―1976）』（中央文献出版社，2003年）上巻３～５頁；呉北光「唱了半個多世紀的『義勇軍進行曲』」（人民網，2004年７月29日）。

16）仏蘭西国歌の第１段落の歌詞の和訳は，『世界の国歌総覧　全楽譜付き』（マイケル・ジェミーソン・ブリストウ編，別宮貞徳監訳，悠書館，2008年）の訳（226頁，訳者名未記載）を基にし，吉田進『ラ・マルセイユーズ物語　国歌の成立と変容』（中央公論社，1994年）の訳（239頁）等を参照にした。

17）本間圭一「行動問われる大統領」，『読売新聞』2015年11月30日。

18）葉暁楠・石暢（本報記者）「成思危的三次人生転折」，『人民日報』（海外版）2013年８月２日。

19）『星条旗』の歌詞は弓狩匡純『国のうた』（文藝春秋，2004年）の訳（128頁）に基づく。

20）土居倫之（上海）「上海時価総額，日本株超す／不動産・理財商品から資金シフト／空売り緩和で過熱けん制」，『日本経済新聞』2015年４月18日。

21）竹内冬美（NQN香港）「深圳，時価総額世界５位に」，『日本経済新聞』2015年５月22日夕刊。

22）「５月株式相場，記録ずくめ／11日連続で上昇／21年ぶり上げ幅」，『日本経済新聞』2015年５月30日。

23）土居倫之（上海）「上海株，売買が急増／NY抜き世界最大／1～４月　個人の短期取引主導／市場過熱に警戒感も」，『日本経済新聞』2015年５月31日。

24）　2007年の前半頃に電脳網で流行り出したと思われるこの替え歌は，国歌への冒瀆と見做される故に作詞者は匿名と為り流布も当局に禁じられた。初出が未詳の上で電脳網から抹消されて久しい歌詞の原文は，遠藤誉『ネット大国中国——言論をめぐる攻防』（岩波書店，2011年）の記述（213～214頁）に拠る。本稿筆者は原著の件の部分の句読点を『義勇軍行進曲』の公式版に合せて修正・追加し，「顛狂」を規範的で且つ部首に病的の性質が表れる「癲狂」に直した（『現代漢語詞典』でも『広辞苑』『日本国語大辞典』でも【癲狂】の項が有り「顛狂」は見当らない［但し『日本国語大辞典』の同項目の「《名》①気がくるうこと。ものぐるい。狂気。てんごう」の場合，用例5点中の2～4番目の「中華若木詩抄〔1520頃〕下」「黄葉夕陽邨舍詩-前編〔1812〕八・春日即事」「西国立志編〔1870―71〕〈中村正直訳〉五・三〇」，及び漢籍出典の「杜甫-戯題寄上漢中王詩」では「顛狂」と書いた］ので，仮に原文の誤字であるなら元の随の意を示す「ママ」［当て字＝儘・任・随］を付けるのが普通か。中国語の「顛・癲」の同音・同声調［diān］や作詞者の疎漏に起因した当初の誤記とも考えられるが，同書「あとがき」の冒頭の「毛首席」［211頁］と同様の誤植の可能性も排除できない。毛沢東の職位「主席」は「主」と「首」の発音が全く異なり［zhǔ と shǒu］，『広辞苑』でも「主席」とは異義・別項に為っている「首席」は中国では単独の職名と成り得ないが，日本に於ける中国関連の記述では混同する例が間々有る。只，この瑕疵は当該快著の価値を損ねる事が無い）。

猶，筆者に由る『炒股進行曲』の和訳は遠藤訳と可也の違いが有り，『義勇軍進行曲』の訳も同書の方（211～212頁）とは共通点が少ない。例えば替え歌の中の「冒着璀燦的泡沫前進」は，遠藤訳では「煌めくバブルへ突き進め」「煌めくバブルに向かって，前に突き進むのだ！」に作る。国歌の「冒着敵人的砲火前進」の「敵の砲火に向かって前に突き進め」に対応する訳であるが，「冒着泡沫」は「（麦酒等）泡が立つ」意も有るので，自ら作った泡沫を承知の上で猛進しようという旨の訳し方を考案した。

25）　江湖遠人「“莫三鼻給”消失時間考　基於読秀搜索的不厳謹推理」，「十五言」（www.15yan.com/story/5dk5IVS7MUz/），初出時期未詳。

26）　漆菲（記者）「奥巴馬還是欧巴馬？——外国政要訳名背後的故事」，『世界先駆導報』2009年11月20日。

27）　漆菲「奥巴馬還是欧巴馬？——外国政要訳名背後的故事」。本稿では陳国華・石春譲「外国人名漢訳的原則」の指摘（『中国翻訳』2014年第4期，107頁）に従って，誤記とされた文中の「偉」（wěi）を「威」に直した。

28）　江湖遠人「“莫三鼻給”消失時間考　基於読秀搜索的不厳謹推理」。

29）　漆菲「奥巴馬還是欧巴馬？——外国政要訳名背後的故事」。

30）　「税金考　試される政治　3／成功すると割を食う会社員／会社員に静かな増税」，『日本経済新聞』2015年12年7日；「ワールド・ウェルス調査報告」（キャブジェミニ＋PBC ウェルス・マネジメント）2015年版の世界富裕層順位に拠る。